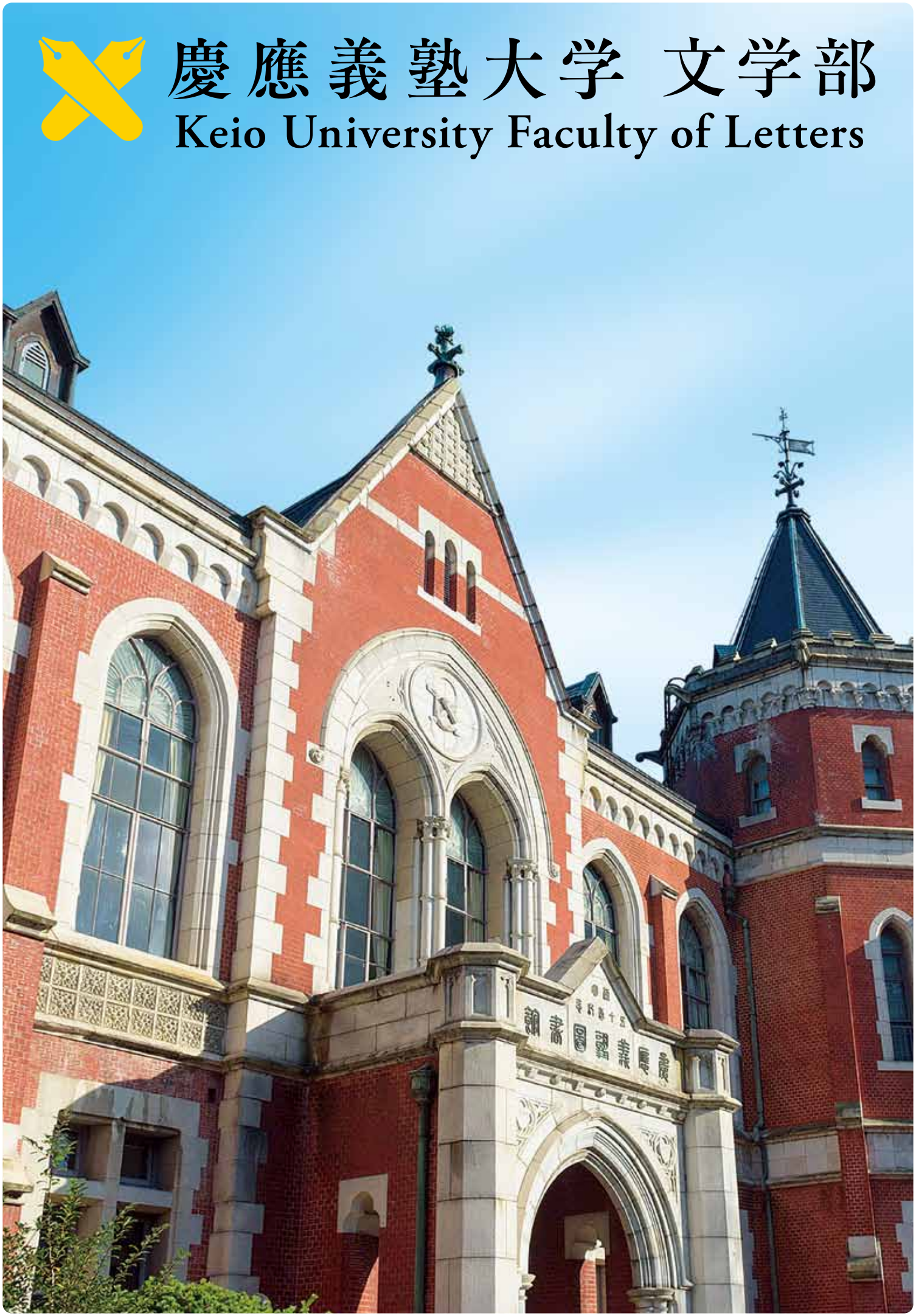
慶應義塾大学 文学部
Keio University Faculty of Letters






HOMO NEC VLLVS CVIQVAM PRAETERITVS NEC SVBSEQVENS CREATVR







CONTENTS

02 3 Key Features 慶應義塾大学文学部 3つの特徴

04 Words of Welcome 総合知の獲得を重視する慶應義塾大学文学部 佐藤孝雄

06 Special Talk 内藤正彦さんスペシャルトーク

10 Student Interview
現役学生へのインタビュー 文学部の「学び」とは？

14 My Research 研究紹介
綾井桜子・佐藤 恵・十川陽一・峯島宏次・松本直樹・上杉 誠・寺澤悠理・渡辺丈彦

22 Alumni Voice 卒業生の声
大きな問いにじっくり向き合える時間 / 文学部でしかできない経験
幅広い知識を得ることができる / 人の動きや社会の動きを学ぶ

24 Departments 専攻・部門ガイド
哲学 / 倫理学 / 美学美術史学 / 日本史学 / 東洋史学 / 西洋史学 / 民族学考古学
国文学 / 中国文学 / 英米文学 / 独文学 / 仏文学 / 図書館・情報学
社会学 / 心理学 / 教育学 / 人間科学 / 自然科学 / 諸言語

43 Graduate Schools 大学院

44 Research Institutes 研究所

45 Correspondence Courses 通信教育課程

46 Study Abroad 留学のすゝめ

48 Scholarship 奨学金

50 Open Campus 2024 オープンキャンパス2024

51 Extension Program 公開講座

52 Data 入試データ＆進路

53 FAQ よくある質問

54 Campus Map キャンパスマップ

Keio University Faculty of Letters

3つの特徴

3 Key Features

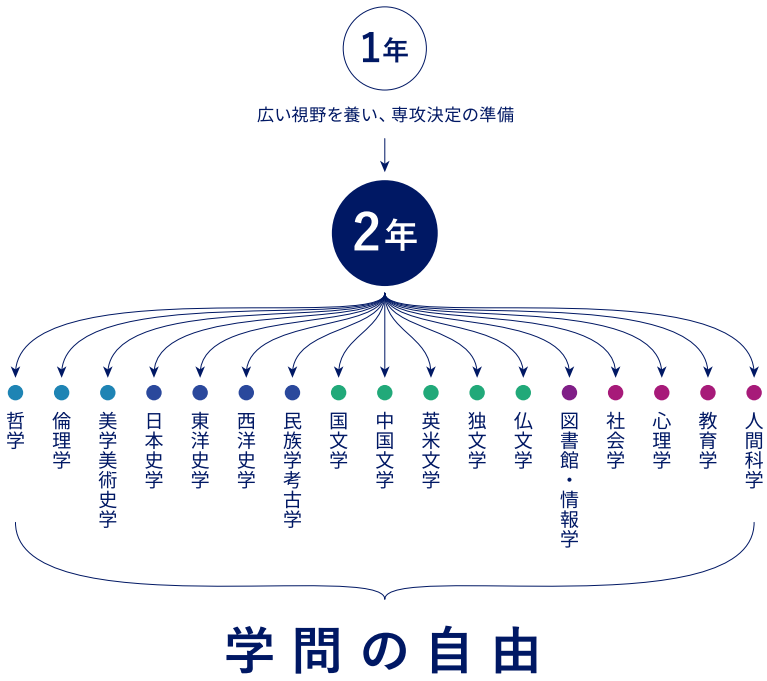
1 17専攻＋2部門という幅広く横断的な専攻分野



慶應義塾大学文学部は、「文」に関するすべての領域を対象にした研究教育機関です。そのカバーする研究領域は幅広く、従来の“文学”のイメージをはるかに超え、学問・芸術・科学を包含する「知」そのものです。各国語を駆使した文学系から、哲学系、史学系、図書館・情報学系、人間関係学系、さらに自然科学までも含まれます。

独立した多彩な専攻と、それらを横断して学べる学習システム。全ては、“言葉＝Letter”を媒介として知の集合体へと結実していきます。これこそが他に類をみない慶應義塾大学文学部の特徴と言えます。

2 専攻選択は2年次からという“学問の自由”



文学部へ入学した新入生は、1年次を日吉キャンパスで過ごし、総合的な視点を養います。そこでは、基礎的な科目と同時に「特論」「総合教育セミナー」と呼ばれる専攻への橋渡しを行う科目が存在します。専任教員がそれぞれの研究分野の授業を少人数で行います。こうした試みの中から2年次からの専攻を決めることができるというユニークなカリキュラムを実施しています。つまり1年次は単一学科の学生として入学し、1年かけて自分が進むべき専攻をじっくりと見極めることができるのです。

そこには学問を自分自身のものとして成長するための自由があります。

3 多彩な人材を輩出する130有余年の歴史

1890 大学部発足と同時に文学・理財・法律の三科が置かれる

1920 大学令にもとづく大学となり文学部・経済学部・法学部・医学部を設置

1951 図書館学科を開設。文学研究科（哲学、史学、国文学、英文学、仏文学の5専攻の修士課程）、社会学研究科（社会学）を開設

1979 民族学考古学専攻を開設

1981 人間科学専攻を開設

1990 文学部開設100年

2000 5学科を人文社会学科に統合

2020 文学部創設130年

文学部は1890年に大学部創設と同時にスタートしました。まさに私学最古の文学部といえる歴史を誇ります。森鷗外が開学当初に審美学を担当しているなど、文学だけでなくリベラル・アーツを網羅していました。その後も、永井荷風、西脇順三郎、遠藤周作、折口信夫、井筒俊彦など、数多くの独自の世界を築き上げた著名な詩人、文学者、民俗学者、哲学者が学生として、教員として文学部を作り上げてきました。

文学部の教育・研究には、創始者福澤諭吉の「半学半教」の精神を受け継ぎ、教員と学生がお互いに切磋琢磨し高め合う精神が今でも息づいています。文学部はこの130有余年の歴史の中から、学術・文化的側面だけでなく広く社会、経済分野に至るまで、数多くの優秀な卒業生を輩出してきました。

Words of Welcome

慶應義塾大学文学部を志望されるみなさんへ

総合知の獲得を重視する慶應義塾大学文学部

慶應義塾大学文学部（Faculty of Letters）は一般にイメージされる「文学部」とは性格を異にする学部です。私たちは「文（Letters）」を広く「学芸」（学問・芸術・科学）全般を包含する「知」を意味する語として捉えています。「文学部」での学びとして一般にイメージされがちな文学や言語学に向き合う分野ばかりでなく、人文社会科学ひいては自然科学に及ぶ多様な分野の集合体である点。それが本学文学部の最大の特徴です。

国内外問わず、今日世界中の大学の研究・教育は、ギリシャ哲学と一神教の世界観に根ざす西欧近代科学によって体系作られており、事象の区別による専門分化を志向するという特徴を持ちます。それだけに、上記の特徴を持つ本学部に対しては、なにやら具体性に欠き、掴みどころない学部という印象を抱く方もおられるかも知れません。しかしながら、今日、学問の専門分化が行き詰まりを迎えているのも事実です。

例えば、西欧近代科学では、動物を研究対象とするのは動物学、人間を扱うのは人類学と区別されます。この背後には、動物と人、自然と文化を対置する二分法的な思考が存在するわけですが、実のところ両者は分かち難く結びつき、相互に影響し影響され合う関係にあり、包括的に調査・研究しなければならない対象でもあります。また、北米北西沿岸の先住民が自らの出自を動物と結びつけて考えているように、私たちの種には異なる事象間に繋がりを見出す感性、流動的知性も備わっています。



凡そこの世界に存在する事象が多くの生物・無生物が複雑に絡み合う「万物照応」とも呼ぶべき様相を呈していることにも鑑みれば、私たちは、異なる事物・事象に繋がりを見出す流動的な知性も呼び覚ますべきでありましょう。幅広い学問分野を内包し、日常的に領域横断的な対話や議論も交わされている慶應義塾大学文学部は、専門知のみならず総合知も育む学部であると自負しています。「半学半教」を重んずる自由な学風の中、本学部で学ぶ皆さんは、専門性を深められると同時に、多角的かつ包括的な視野も育めるはずです。

5学系17専攻・2部門が提供する学びの自由

慶應義塾大学文学部では、「人文社会学科」の一学科制を敷き、その下に5つの学系と17の専攻（哲学系：哲学、倫理学、美学美術史学／史学系：日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学／文学系：国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学／図書館・情報学系：図書館・情報学／人間関係学系：社会学、教育学、心理学、人間科学）、さらに自然科学と諸言語の2部門を置いています。関連する大学院としては、文学研究科および社会学研究科があります。本学部には、学内10学部中、理工学部、医学部に次ぐ数となる150名余りの専任教員が所属しています。各教員は独創的な研究活動を活発に進め、それぞれ国内外の専門分野で注目を集める成果をあげています。

学部の定員は一学年800名。1年生は専攻を特定することなく入学し、広々とした日吉キャンパスで、多様な学問分野に触れ、幅広い教養を習得するとともに、「知」の基盤をなす語学の習得に努めます。2年以降は伝統ある三田キャンパスで17専攻のいずれかに所属し、専門的な研究に取り組みます。文学部を特徴付ける教育の形態としては、少人数教育をあげることができます。ゼミ（研究会）や



文学部長 **佐藤孝雄**

各種演習科目など、三田キャンパスで開講される授業科目の多くが小規模であるため、教員と学生、さらに学生同士の間には緊密な関係が築かれます。



慶應義塾大学文学部の伝統と革新性



建学者の福沢諭吉が残した「自我作古（じがさっこ）」という言葉は、今日なお慶應義塾が大切にする信条の一つです。「我（われ）より古（いにしえ）を作（な）す」と読むこの言葉で福澤は、如何なる困難や試練が待ち受けていようとも、勇気と使命感を持って、前人未踏の新しい分野に挑戦せよと訓じました。



今日、私たちは、地球環境の悪化や、国や地域を超えて進むグローバル化、さらにはAIの発達に伴って生じる新たな社会問題など、既存の知識や仕組みでは対応しきれない数多くの難題に直面しています。新型コロナウィルス感染症により対面での活動が制限される状況に陥ったことは記憶に新しいところですが、今後も環境や社会に如何なる変化が生じるかわかりません。そのような時代に生きる私たちは、人間・社会・自然などに対する総合的な知識と、論理的かつ柔軟な思考力を身につけなければなりません。



過去から現在に至る人・社会・自然を扱う多様な分野を抱え、既存の学問体系の脱構築も目指す慶應義塾大学文学部は、激動の時代に挑むために必要な知識と能力を提供できる学部であると自負しています。その意味で、本学部は、1890（明治23）年の創設以来130年以上もの長きに亘る伝統をもちつつも、革新的な学部とあるといえます。



Special Talk
Naito Masahiko



内藤正彦さん

Profile

1967年生まれ。テレビ朝日取締役、同報道局長。
慶應義塾大学文学部を卒業後、テレビ朝日入社。
取材部、社会部（KC庁クラブ、司法クラブ）、外報部を経て、
カイロ支局長、ロンドン支局長、報道局ニュースセンター長などを歴任。
主に中東地域の専門記者として紛争地や戦地を取材。
共著に危険地報道を考えるジャーナリストの会（編）『ジャーナリストはなぜ「戦場」へ行くのか
――取材現場からの自己検証』（集英社新書，2015年）がある。

テレビ朝日取締役・同報道局長である内藤正彦さんは、
文学部を卒業後、テレビ朝日の記者として中東地域を中心に
紛争地や戦地を数多く取材されてきました。
報道の最前線で活躍されてきた内藤さんは、
「慶應」での生活から何を学び、何を得たのでしょうか？
今回はご自身の学生時代や報道の現場、
そして慶應義塾への思いについて語っていただきました。



インド放浪、民族学考古学専攻

一年生の夏休みに700ドルを持ってインドの南西部を放浪したんですね。藤原新也さん[1]の『印度放浪』に憧れていて。当時の700ドルといえばそれなりのお金でしたし、なにせ19歳と若かったので、そこでは楽しく過ごしたのですが、帰国後に劇症肝炎手前のウィルス疾患を発症してしまいました。哲学か何かのレポートを日吉キャンパスに提出しに行った翌日、42度の発熱で奥歯がガチガチとなったんです。父親に地元の病院に連れて行かれたときにはもう意識がないような状態で、そのまま入院しました。最初はコレラと診断されたので、日吉キャンパスでは並木道から1年生の教室までを消毒しなければならなくなって、大学にはご迷惑をおかけしました。ただ当時の先生にインドでの体験をお話ししたら「その調子で思い切って頑張りなさい」と励まして下さって。あとになって考えると、この先生の言葉がとても大きかったと思います。

2年生になって民考（民族学考古学専攻）に進みました。先生方も面白かったのですが、とにかく先輩たちが個性的というか、バラエティ豊かというか、とても刺激的でしたね。皆さん、自分の世界を持っていて、自分が興味のある事しかしない。他人に干渉しない文化がとても心地よかったですね。民考って、当時のバブルに浮かれた慶應のキャンパスとは隔絶された世界だったじゃないですか。奇人変人というか、「俗っぽさ」がないんですよ。本当に自由闊達に、好き勝手やっていたというのが素晴らしかった。ただ、これでこの先どうなるんだろうって思ってはいましたけどね。

当初はモンゴルや遊牧民、江上波夫さん[2]の騎馬民族説などに興味があったのですが、当時のソビエト政権下では現地に入ることが難しかった。ちょうどその頃、［文学部東洋史学専攻の］坂本勉先生から「遊牧民なら“世界最大の少数民族”クルドも面白いよ」というアドバイスをもらったんですね。クルドについて当時の日本ではほとんど報じられていませんでしたが、世界的には、例えば『シュピーゲル』[3]

などでは注目されていました。それなら実際に現地に足を運ぶことができるので、夏は毎年、トルコとイランの国境地帯を見てまわる生活をしていました。まずイスタンブルに行って、そこから東へ東へ移動して、ディヤルバクルという都市まで、そしてイランに入りました。イラクには入れませんでしたけど。あと、ヤマンラール水野［美奈子］先生が三田キャンパスの言語文化研究所でトルコ語を担当されていたのですが、水野先生から旦那さん（アイドゥン・ヤマンラールさん）を紹介してもらい、色々と可愛がってもらいました。

進路、就職、報道の現場

当時の日本はいわゆるバブル時代で平穏なムードでしたが、国外に目を向けると、ベルリンの壁が崩壊し、ソビエト連邦が溶け始めつつありました。とにかく世界が大きく揺らいでいた時期です。私が最後にイランを訪れたのはイラン・イラク戦争が終わる1988年です。このときに、イラン北西部のトルコとの国境にマークーという小さい町があるのですが、そこで暴動が起きてクルドが大変なことになって、私自身も巻き込まれました。その後、イラクのハラブジャという町では5,000人規模のクルドが化学兵器で虐殺されました。こうした事件に大きなショックを受けたのですが、メディアではほとんど報じられなかった。湾岸戦争（1991年）ではCNNがバグダードから中継をして現地の映像が配信できるようになりますが、イラン・イラク戦争の頃はまだありませんでした。

就職への意識は極めて低いダメな学生でしたが、とにかく、そうしたことがあって報道機関に入ってみたいと思うようになりました。実のところテレビにもメディア業界にもまったく興味はなかったのですが、ありがたいことに今の勤め先に雇ってもらいました。しかも29歳でカイロ支局長にしてもらい、とても自由に働くことができました。結果をしっかり出せばやりたい事をいくらでもやらせてくれる社風は、自分に合っていたと思います。

中東地域の紛争地や戦地の報道はとても大きく変わりました。私が現地で取材していた当時は、まだスマートフォンで撮影するなんてできない時代ですから、高価なENGカメラ（ショルダーカメラ）を持って入ると、アメリカでもイギリスでもない日本のメディアが来たといって現地の人々が守ってくれたんですよね。そこそこ現場に行けば仕事が成立するというか、そうしたかたちでずっと展開していました。ところが、2003年か2004年ごろから、このビジネスモデルは完全に崩壊します。現地に行って、足で稼いで、映像とファクトを詰めて、それを出すというのが成立しなくなったんですね。例えばイスラム国（IS）ですけど、彼らは自分たちのプロダクションを持って、そこで映像を作成して、虐殺の瞬間を撮って、それを自分のチャンネルにアップロードしたりする。自分たちで作れるようになったんですよ。私がロンドン支局

内藤正彦さん（左）と佐藤孝雄文学部長（右）



長だったのは、ちょうどアラブの春とかシリアの内戦、リビア戦争があった時期（2011年前後）ですが、その頃、それまでの仕事の仕方ではちょっと厳しくなってきたっていうのを肌で感じました。あと最近は、平たく言うと理系の世界になってきてるというか、デジタルで取材して、AIを駆使して、世界中に飛び交う映像と情報をいち早く察知して、そのファクトチェックをする。足で稼ぐ我々の時代とは仕事の仕方が全く違ってきています。とはいえ、「日本人の目で見て、日本人に届ける」ことはやはり大きいので、これをどうにか復活させないといけないなとは思っています。だから若い人には、デジタルネイティブの人間が現場に行ってそれを駆使しながら、フィジカルなコンタクトっていうのを取ってほしいですね。そのアナログとデジタルの二つがうまく融合したかたちじゃないと、新しいものって生まれてこないんですよね。

そういう意味で時代は再び乱気流に入ったなという感じがするんですけど、この間、二郎[4]のオヤジに「この面白い時代に慶應のキャンパスで過ごせる学生って、色々な事が出来るだろうな」なんて言ったら、「冬のアフガンの塹壕で凍えてた野郎が！」って笑われました。もう30年の付き合いになるんですけど、私がアフガニスタンから戻ったら、「豚食ってないだろう」ってごちそうしてくれたんですよ。私がロンドンにいたときには、『ガーディアン』[5]に紹介されたりして、冗談かと思いましたもんね。『ガーディアン』ですよ。

慶應らしさとは

今考えると、文学部や民考の「空気」が良かったですよね。みんな好きなことしかやっていない、みたいな。慶應ブランドとか、同窓・同門ですぐ群れたりするのが好きではなくて、「慶應ボーイ」とは程遠い、一般的な「らしさ」とは対極的な学生でした。今でもあまり好きではありませんけど、とにかく学生時代は慶應的な事やモノに背を向けていたと思います。ただ今になって振り返ると、実はこれが意外と慶應っぽいんじゃないかと。慶應義塾の「独立自尊」ってそういうことなんじゃないですかね。正直なところ、非慶應的なところで生きてきたと思うんですけど、今思うと、当時の自分がやってきたことって、極めて独立自尊の世界に守られていたというのはあるんですよ。それって、社会に出る前の自分を作ってくれた価値観とか、自分を守ってくれたキャンパスの「空気」とか。この歳になって、慶應義塾に自分の基礎をつくってもらったと改めて感じますね。民考はそれこそ独立自尊の極みのような空間で、一癖も二癖もあるエラく尖った人たちが多かったですから、遠慮も引け目もなく、自分の感覚とか感性を信じて、トライ&エラーの日々を楽しく過ごせたと思います。もちろん「なんてところに来ちゃったんだろう」とも思いましたけど。

慶應の文学部って、今の世の中の動きだとか、そういうものを広く感性や感覚を含めてつかんで、自分がこの先どこに行こうかっていう指針を決めるには、とても良い学部だと思います。色々な人と会って、色々な学問の匂いに触れる場でもありますよね。色々な情報が入ってきて、「学問の総合商社」みたいなところがあるんですね。情報ってネットに氾濫している時代ですけど、耳学問というか、一緒にご飯を食べたり、二郎で並んでるときに聞く言葉とかってインパクトが全然違うじゃないですか。入ってくる強さが違ったりするので。そういうときに私は慶應の文学部っていいなと思いますね。

1 藤原新也（ふじわら しんや、1944年−）：日本の作家・随筆家、写真家・旅人。
2 江上波夫（えがみ なみお、1906年−2002年）：日本の考古学者。東京大学名誉教授。文化功労者・文化勲章受章者。
3 『デア・シュピーゲル Der Spiegel』：1947年に創刊されたドイツのニュース週刊誌。
4 東京都港区三田に本店を構えるラーメン店。創業から塾生・塾員との結びつきが強い。
5 『ザ・ガーディアン The Guardian』：1821年に創刊されたイギリスの日刊紙。

Student Interview



現役学生へのインタビュー

文学部の「学び」とは？

東洋史学専攻二年生、教育学専攻三年生、人間科学専攻四年生（取材当時）の三人に、
文学部の魅力について語っていただきました。

幅広い知識や考え方が身につくシステム

── 皆さんが慶應の文学部に入学した理由は何ですか？

A・F：私は姉が慶應の卒業生だったこともあり、わりと早くから慶應を志望していました。大学受験の時点では自分のやりたいことが決まっていなかったのですが、文学部では二年次から専攻に分かれるので、一年次に自分のやりたいことを探してから専攻を選ぶことができると思い、文学部に入学しました。

N・W：高校生の頃には、明確に自分が何について専門的に学びたいのかがわからず、大学に入ってから決めたいと考えていました。一度は何かひとつのことをしっかり集中して学びたいという気持ちから、一年生のうちに様々なことに目を向けたうえで、二年生から専攻を選べる点に魅力を感じ、慶應文学部への入学を決意しました。

J・E：僕は高校で少しダンスをかじっていまして、先輩から慶應はダンスサークルが強いと聞いていたこともあって志望しました。インカレサークルも沢山あるので慶應じゃなくてもいいんですけど、慶應ボーイのダンスサークルというのに憧れていたこともあります。文学部は入試方法が僕にとても合っていたのと、語学や心理学、社会学といった文系の学問が高校の頃からすごく好きで、それを幅広く学べることから第一志望としました。

── 入学してみて実際の印象はどうでしたか？

A・F：一年生のときはコロナ禍で対面の授業がまったくなく、それほど入学した実感はありませんでした。ただ私のように最初の一年間でやりたいことを探そうと思っている友達にはあまり出会わなくて、その点は少し意外でした。

N・W：自分自身を追求できる場がイメージより多く用意されていたことに驚きました。高校までには出会えなかったような色々な人と関わることができて、いい意味で価値観が変わり、それまで見てきた世界はほんの一部にすぎず、世の中には学校で学ぶことのできない様々なことが同時発生しているのだということを体感しました。

J・E：高校と違って授業選びでも自由がきく分、自分の軸について考える時間が増えたなと思います。文学部は二年生から三田キャンパスというのがほかと違うところですね。最初はうれしかったのですが、他学部の友達はずっと日吉にいて、離れ離れになってしまうさびしさも少しありました。

── 二年次から専攻を選ぶ文学部の仕組みをどのように思いますか？

A・F：自分の進路が決まっている人にも、決まっていない人にも、自分としっかり向き合う時間を確保できるという点で、とても有意義なものだと思います。私は最初、英語に関心があったのですが、一年次の一年間で少しずつ考えが変わっていったので、私にはとても良かったと思います。

N・W：私はこの仕組みに惹かれて入学したのですが、その選択は正しかったと思います。一年生の頃は大学について右も左もわからず、授業についていくこと、友達を作ること、高校までとは全く違うシステムに慣れることなどに必死でしたが、ようやく落ち着いてきたところで、今度は自分自身について問い直すためのきっかけになると思います。

J・E：他学部だと入学したらその道に進むことが確定しますが、文学部は幅広い選択肢の中で一年間考える猶予もあるし、自分で選択している感じがすごく強いですね。自分が好きなものは何だろう、これから四年間自分は何を学びたいのだろうと考えるきっかけになるので、そこはとても有意義だったと思います。

それぞれの専攻での学び

── それぞれの専攻に進んだ理由は何ですか？

A・F：入学時は英米文学専攻を志望していたのですが、総合教育科目の授業を受けるなかで歴史に関心があることに気づきました。西洋史学専攻でフランス革命を勉強しようかとも思ったのですが、東アジア史や中東・イスラーム世界史を扱う東洋史学専攻の方が私には選択肢が多くあるように見えたので、東洋史学専攻を選択しました。今は中東・イスラーム世界史を中心に勉強していこうと考えています。

N・W：総合教育科目がきっかけで、発達障がい児教育に関心をもったからです。障がいをもつ人に対して無意識のうちに植えつけられている先入観は、教育の面から変えていけるのではないかと考えています。そのため、過去・現在の障がい児教育の実情について学び、彼ら彼女らにとって理想的な社会のあり方はどのようなものなのかを考えたいと思っています。

J・E：一年間ではまだ自分はこれに進むぞという将来像が見つからなかったこともあり、社会学や心理学などを幅広く学べる人間科学専攻にすぐ決めました。

── 皆さんの専攻の最大の学びの特色は何だと思いますか？

A・F：東洋史学専攻は多様な地域の歴史を扱っているので、そのなかで自分の研究テーマを探すことができるのは特色のひとつだと思います。また、一言で「歴史」といっても、そこから宗教や文化など、様々なことを学ぶことができます。中国食文化の授業では、中国料理のなかにイスラーム世界の影響を受けたものがあることを学び、とても面白かったです。

N・W：学校教育の問題について、「人間形成」の観点から考察できることだと思います。十六種類ある教育学特殊という授業では多角的な視点を手に入れることができます。そこで学ぶことによって、学校や家庭や地域に散りばめられた多様な人間形成の可能性を、様々なアプローチでもって考えることができるようになると思います。

J・E：「人間科学特殊」の授業ひとつとっても、先生によって学べることがまったく違ってきます。選択肢がどの専攻よりも多いのが一番の特色だと思います。

Student Interview

― それぞれの専攻・学年で現在どのような学業に取り組んでいますか？

A・F：私はまだ自分の研究テーマを探している最中です。そのために食文化や宗教、アラビア語など、幅広く色々なことを学ぶようにしています。

N・W：ゼミに所属し、教育哲学の観点から発達障がい児教育について研究しています。また、プラトンの『メノン』をグループごとに分析し、発表しながら学習しています。ゼミ以外でも、教育学に関連することはもちろん、他専攻で興味のある分野の授業も履修し、教育学以外の視点も手に入れられるような時間割を組んでいます。

J・E：常松先生のゼミで社会学について学んでいるのと、四年なので自分の卒論を頑張って書いている真最中です。テーマは「フェイクニュースと法規制」です。新型コロナウイルスの流行下でデマや偽情報が広まっていますが、これに対する日本や世界各国の法規制の特徴、また規制すべきかどうかをめぐる議論の対立を研究しています。

― サークル活動やアルバイトはしていますか？学業とどのように両立させていますか？

A・F：私はダンスサークルに入っています。サークル活動は週に五日、放課後や土日にあります。あとアルバイトも週二日ほどしています。授業の課題などがあるときは、週のどこかでまとまった時間を作り、そこで集中して取り組むようにしています。また、通学時間が長いので、通学中に教科書を読んだり、課題の準備をしたりしています。

N・W：塾講師のアルバイトを週に三回ほどしています。大学での学びは授業内で吸収し、課題は自宅に帰ってから行っています。夏期講習などの時期は少し忙しいですが、大学の学期が終わった後から始まることが多いので、両立は苦ではないです。

J・E：三年生のときはダンスサークルの代表を、今は全国のダンスサークルをまとめた連盟の会長をしています。ダンス活動にはお金も必要なのでアルバイトは掛けもちをしています。

文学部での学びを将来へ

― 大学入学後、自分が成長したと思うところはどこですか？

A・F：勉強とサークルやアルバイトを両立させるため、時間の使い方が上手になったと思います。また、高校のときと比べて、大学では色々な価値観をもつ人や経験のある人と関わる機会が増えたと思います。そのため、これまで以上に相手に関心をもって人と接するようになった気がします。

N・W：多角的な視点から物事を見られるようになったと思います。高校生までは自分が見えているもの、考えていることが全てというような自己中心的な考え方でしたが、他の人の価値観を受容したうえで物事を考えられるようになったと思います。

J・E：授業選択でも自由度が高いので、自己責任の部分が大きくなってきます。やはり大学に入ってから自分について深く考えることが増えて、自己分析に繋がったのは大きな成長かなと思います。

― 現段階で将来の進路についてどのように考えていますか？

A・F：今のところ就職についてはあまり考えていません。航空関連や金融など、いくつか進みたい方向はあるのですが、東洋史学専攻に入って中東・イスラーム世界への関心も強くなっています。今後も勉強を進めていくなかで変わってくるかもしれません。ただ、どの道に進んでも大丈夫なように、色々な知識を吸収して、たくさんの経験を積みたいと思います。

N・W：教材作成にかかわることができるような、教育系の企業に就職したいと考えています。中学生くらいの頃から、学習者目線に立った教材を自分で作ってみたいと思っていて、それが実現できるとうれしいです。大学で学んだことを生かし、それぞれの子どもに合わせた学習方法を提供できるような教材作りをしてみたいです。

J・E：IT系のベンチャー企業に内定しています。就活の軸にしていたのは、とにかく死ぬまで汗水たらして忙しくして、多くの人に影響を与えたいということです。三百人のサークルをまとめて、今は一万人ぐらいの連盟の責任者になっていますが、やはり多くの人に役立つようなことをしたいなと思っています。今後転職するにしても、社会や人々のためになるようなことを念頭に置いて活動していきたいです。





東洋史学専攻 **A・F** さん

東京都公立高校出身



教育学専攻 **N・W** さん

東京都私立高校出身



人間科学専攻 **J・E** さん

神奈川県公立高校出身



My Research

知と文化の歴史的変容から読み解く教育思想史

教育学専攻［教授］

綾井桜子 Ayai Sakurako

専門領域：フランス教育史、教育思想史
研究内容：近代フランスの教育の歴史を主たる研究対象として、特に啓蒙主義の時代から19世紀末までの教育思想の意味を、知的・社会的・文化的文脈の中で明らかにしています。教育システムの中でも、人文学や哲学の教育と学習に焦点を当てて、フランスの中等教育の変遷を追っています。また、哲学研究や知識の社会史の観点から、知識と教育の現代的な問題を考えることにも興味があります。

近代フランスの教育史・教育思想史を専門としています。特に、啓蒙主義の時代として知られる18世紀末から、今日の学校教育の基本的なかたちが出来上がる19世紀末にかけての時期を対象としています。自律的な主体形成や市民形成をはじめ、〈教育〉についての自覚的な問いかけや意識が、近代的子ども観や近代家族、近代社会の誕生を背景に教育理論として顕在化するのが近代という時代だからです。

出発点となったのは、デュルケームの『フランス教育思想史』という書物です。一般に、思想史というと、ある特定の人物の思想を対象とするものや、列伝を思い浮かべますが、同書は、フランスの中等教育を対象とした思想史です。同書の特色は、フランスにおいて、職業人や専門的知識の教育ではなく、一般的な人間形成を目的とする教育観がいつ誕生し、どのような文化的、歴史的経緯によって現在に至っているのかを、キリスト教的精神と異教的精神、知識・教養観、コレージュ（学寮・学院）の発展、主要な教育思潮をとりあげながら克明に明らかにしていることにあります。職業教育や専門教育への社会的な要請が高まるなかで、より大きな歴史的枠組みのなかに教養問題を位置づけなおしていること、フランスの教育観を相対化するための視点を提示していることも特筆すべき点として挙げられます。

異文化の教育を対象とし、これを思想史的な観点から明らかにすることは、私たちが当たり前と見なしている教育観を問い直し、教育のリアリティを別様にみることを可能にします。私自身は、フランスの教育にみられる知識観や教養観について、デュルケーム以前と以後の時代に対象を広げながら考察をしています。現代フランス中等教育における哲学教育をめぐる考察も、こうした関心の延長線上にあります。教育を知的文化との関わりで研究するためには、西洋の歴史、人間観、自然観、言語観、哲学、社会的背景などについての幅広い理解が必要となることにも気づかされます。そのような意味で、教育について知るとは、総合知をもって可能になると言えます。17専攻から成る慶應義塾大学文学部は、教育についての幅広い知的探求に最適な条件を揃えています。急速な変化が求められる現代にあって、近代の枠組みでは捉え難い教育の側面にも目を向け、人文・社会科学の新しい方法論にも学びながら、教育を問いなおしてゆきたいと考えています。





My Research

過去のことばから当時の人びとの言語意識を再構成する

独文学専攻［助教］

佐藤 恵 Sato Megumi

専門領域：歴史語用論、ドイツ語史
研究内容：ことばの使い方から当時の社会や人間関係を読み解くような言語史研究に魅力を感じて、研究者になりました。例えば私はいま、モーツァルトの手紙やベートーヴェンの筆談帳を研究して、今から200年ほど前に書かれた言語データから当時の社会や書き手たちの人間関係を再構成するという研究をしています。

私の専門分野はドイツ語史です。英語のhistoryとstoryとが同じ語源であるように、ドイツ語の《歴史》を人びとの息づかいが聞こえてくるような《ストーリー》として描いてみたいと思っています。歴史上、ドイツ語を母語とした作曲家は数多くいます。彼らの実生活の様子が音楽史研究で丹念に調べられているおかげで、書簡等に書き遺されたドイツ語文がそれぞれどのような状況で書かれたものかが生き生きと、手に取るようにわかります。言語史研究と音楽史研究をリンクさせることで、話し手の心理の機微をうがつようなストーリー性のあるドイツ語史が描けそうに見えてきます。

私はモーツァルトの故郷であるザルツブルク（オーストリア）に留学し、ここで博士論文（ハイデルベルクCarl Winter社より2022年12月刊行）を書きました。ザルツブルクで話されるドイツ語は、今も昔も標準ドイツ語とはかなり異なるのですが、18世紀後半にモーツァルトが家族や知人に書いた書簡を見てみると、彼の放埒なキャラクターイメージにもかかわらず、とても標準的なドイツ語で書かれています。実は、インテリであった父レオポルトの影響が強くあったのです。ちなみに母アンナの書いたドイツ語は、かなり方言性が強いものでした。

聴力を失った晩年（19世紀初め）のベートーヴェンは、居を構えたウィーンで家族、友人から家政婦に至るまで、さまざまな人物たちと筆談帳を用いて会話しました。例えば、ドイツ語のwegen「～の故に」という前置詞には（所有格を用いる）標準形と（目的格を用いる）方言形とがあります。ベートーヴェンの甥カール（当時12～20歳）はたいてい方言形を用いるのですが、ベートーヴェンに対してだけはほぼ毎回、標準形を用いています。あたかも、伯父に対して「です・ます」体で話す甥のようです。これは、ベートーヴェンに対する畏敬の念の現れとも取れますが、カールの父親の死後、養父となったベートーヴェンからの過干渉に悩んだカールが19歳の時に自殺未遂を起こした史実を踏まえると、カールとベートーヴェンの間の疎遠感が悲しくも現れているという解釈も成り立ちます。

歴史的段階の言語の実態から当時の人びとの言語意識を再構成するというのは難しい試みではありますが、ことばを観察することによって、伝記等では語られてこなかったような、書き手の人物像、意外な素顔を発掘していきたいと思っています。



ホーエンザルツブルク城を臨む
個人研究室にて（ザルツブルク大学）





My Research

古代の法制史料からみる国家・社会・人

日本史学専攻［准教授］

十川陽一 Sogawa Yoichi

専門領域：日本古代史
研究内容：律令制を中心に、奈良・平安時代の国家と社会との関係に関心を持っています。日本律令の母法である中国律令との比較や、中国から継受した律令が日本に定着してゆく過程について、都造りや官人の制度から研究を進めています。

古代の日本のうち、私は、律令制、そして律令国家という存在に関心をもって研究を進めています。律令制のもとでは、日本列島の広範囲に行政区分が施行され、その後の日本の枠組みを形成した時代ともいえます。またこの時代には、平城京・平安京などの大規模な都が立て続けに造営されました。こうした相次ぐ大事業がいかに遂行されたのか、中国律令との比較を軸にしながら分析し、国家の支配構造を検討したのが、私の最初の研究テーマです。

またそのなかで、私財を投じて都造りなどの国家事業に参加し、褒美として位をもらう地方豪族の存在がふと気になりました。位とは、官人（現代風にいえば役人）の身分です。国家の運営に官人は不可欠な存在ですが、正規のポストに就けなくとも位を持っていることや役所と関わる身分にあることが重要だったようで、従来考えられていた以上に多くの人の需要があったことが明らかになってきました。また、国家も彼らのニーズを踏まえて身分を与え、支配に利用しようとする側面などもあったようです。このような人々と国家との関係によって、律令制に基づいた文化が、広大な裾野へと展開してゆくと見通しています。

こうして最近では、地域史研究も実践しながら、地方も含めた律令制の定着・展開の過程について研究を進めています。

このように書いてくると、少し堅苦しい研究にも思われるかもしれません。特に私の研究は、法制度を主な史料としています。ただ、どのような史料であれ、人間の営みの結果であることに変わりはありません。味気ないように見える法制史料からでも、時代背景や他の史料の内容なども踏まえて立体的に情報を引き出してみると、過去の人々のしたたかな生きざまなど、国家と社会、さらに人々との様々な関係が浮かび上がってくることがあります。

慶應義塾大学文学部日本史学専攻では、古代から近代まで、諸外国との関係や制度比較といった国際的な視点も踏まえながら、宗教史・経済史・法制史など多様な研究が進められています。こうしたなか、複眼的に史料との対話を続けています。



聖武天皇遺愛の品を法隆寺に献納した際の文書（原文書は東京国立博物館所蔵）を、19世紀に模刻したもの。





My Research

多様な分野とつながり、広がりを見せる哲学の問い

哲学専攻［准教授］

峯島宏次 Mineshima Koji

専門領域：言語哲学、論理学、意味論・語用論
研究内容：現代の言語哲学と意味論・語用論の観点から、言語・論理・認知の接点にかかわる問題群を中心に研究を行なっています。また、言語学・計算機科学・認知科学など周辺分野との交流のもと、人間の言語理解の形式的・計算的なモデルを構築することに関心をもっています。

文学部哲学専攻では、古代から現代まで、哲学の幅広い分野について学ぶことができます。私はその中でも、言語と論理の哲学に関係する問題を中心に研究しています。「言語と論理」というと難しく感じられるかもしれませんが、私たちがふだん使っている言葉やそれが伝える意味や情報といったものが主題で、その最初の方にある問いを理解するのはそれほど難しくありません。例えば、私たちはいまここで初めて目にした文章でもほぼ一瞬で理解し、そこから新しい情報を引き出すことができます。人からはっきりとルールを教わったわけでもないのに、こうやって言葉を理解したり、思考を整理したり、人に何かを伝えたりできるということは、考えてみると不思議なことです。問題の一つはこういうふうに言い換えることもできます。単語には辞書というものがありますが、単語が集まってできる文や、ここに書かれているようなもっと長い文章には「辞書」というものはありません。それはなぜでしょうか。私たちは、旅行会話集のようにひとつひとつの文を丸暗記して使っているのではなくて、単語の知識と何らかの「ルール」に従ってその場で、いわば即興的に文を作って話をしているように見えます。その「ルール」とはいったい何でしょうか。こうやって考えていくと、たんなる音や文字が連なったものが何かを意味することができるのは実に不思議なことに見えてきて、そもそも意味とは何か、それはどこにあるのか、何かを意味することがどうして可能なのか、こうしたすぐには答えが出ないような問題に頭を悩ませることになります。

ここで挙げたような問いは、言語の哲学の問いであると同時に、論理学や言語学をはじめとして、現在では言葉の意味や情報にかかわる幅広い領域で分野横断的に研究されています。実は、哲学者の仕事がこうした新しい研究の分野を確立するのに大きな役割を果たしたといっても間違いではありません。現在研究されている論理学は、現代哲学の一つの流れを作ったフレーゲやラッセルの研究に始まるもので、それはやがてゲーデルやチューリングといった人たちの仕事を経て、現在の情報科学の成立に結びつきました。また、言葉の意味やコミュニケーションにかかわる言語学の分野は意味論や語用論と呼ばれますが、そこで何をどのように論じるべきなのか、その主題と方法を確立するのに哲学と論理学の考え方は大きな役割を果たしてきました。私の現在の研究は、論理学や言語学にまたがり、さらに情報科学、特に人工知能や自然言語処理の分野の人たちと協働して新しい問題に取り組んでいます。哲学の問いは、既存の分野とつながっていると同時に、そこにはおさまらない境界領域にある問いであるといえるでしょう。

私自身、この文学部哲学専攻で学びました。最初からはっきりした見通しをもって、哲学専攻を選んだわけではありません。最初はぼんやりと、何かできるだけ根本的で普遍的なことを知りたいと考えていました。いまから考えるとまったく無謀ですが、すでに方法が確立して進歩の基準がはっきりした分野よりも、どうしたら「進歩」と言えるものが得られるのか、まだそれがはっきりしない分野の方が魅力的に見えたのです。これは雲をつかむような話になる恐れがあり、より具体的な問題や応用から入って、それから哲学的な問題にたどり着く、という方向もあることを付け加えておきます。そのころ、日吉で一年生向けに開講されている「人文科学特論」という授業（単に「特論」と呼ばれることが多い）を哲学専攻の斎藤慶典先生が担当していました。一年生のときにゼミを体験するような雰囲気です。そこでは問題を解決するだけでなく、できるだけ根本的なところから、誰も気づかないような新しい問いを立てて考えることの面白さを学びました。こうしてなんの迷いもなく哲学を選択し、それから言語と論理の問題に魅了され、いつのまにか新しい知的な世界が開けてきました。文学部では、哲学や論理学だけでなく、言語文化研究所で開講されているさまざまな言語学科目を学ぶことができます。私自身、この学際的な環境で何人かの先生と出会い、単に本や論文に書かれていることから知識を習得するのとは異なる、生きた経験として哲学（それから論理学と言語学）を学びました。これは語学や音楽を単に「習う」のではなく、実際に話したり演奏して楽しんだりする実践に近いものと言えます。こうした「哲学の経験」を共有することが、これからの文学部の学生にとっても重要なものになると考えています。



My Research

知識情報基盤としての図書館とその研究

図書館・情報学専攻［教授］

松本直樹 Matsumoto Naoki

専門領域：図書館・情報学
研究内容：公立図書館の制度・経営を中心に研究しています。特に、外部環境との相互作用の中で公立図書館がどのように事業を形成しているかを、行政学等、学際的アプローチを使って明らかにしてきました。得られた知見をもとに、コミュニティの知の拠点としての図書館のあり方を探っていきたいと考えています。

私はこれまで、公共図書館を中心に、制度、経営、サービスなど多様な観点から研究を行ってきました。最近では、戦前の図書館制度や、近年話題になることの多い指定管理者制度についても研究しています。指定管理者制度は、民間企業などによる図書館運営を可能とする制度であり課題も多くあります。また、図書館が効果的に機能するには、施設やコレクションに加えてそこで働く「人」が重要です。そのため、人材育成や専門職の認定制度にも関心を持って研究しています。これらの研究に加えて、自治体に設置されている図書館協議会などの委員として実践にも携わってきました。

図書館は、社会の中で知識、情報、データを収集し、組織化し、蓄積・保管し、提供する重要な機関です。そうした機関は、民主主義社会を機能させる上で不可欠です。このことは、誤情報や偽情報に代表されるような情報を考えれば当然ですよね。そして、社会がデジタル化しネットワーク化する中でも、図書館やアーカイブズ（文書館）などの機関がデジタル情報を適切に組織化し、蓄積・保管し、継承していくことの重要性は変わりません。私は、このような役割を果たす機関の一つである図書館に焦点を当て、その制度や経営について研究してきました。

図書館は歴史的に古くから存在してきましたが、「図書館学」として図書館自体を学問的な対象とするようになったのは19世紀以降です。バイエルンの図書館員、マルティン・シュレティンガーやコロンビア大学のメルヴィル・デューイなどが経営の効率化という観点から研究に取り組むようになりました。その後、専門的・科学的な情報に焦点を当てたドキュメンテーション運動が進展するとともに、人々の情報行動を研究対象に含めた「情報学」と呼ばれる学問が形成されました。そして、「図書館学」と「情報学」が結びつき、「図書館・情報学」という学問として欧米を中心に発展してきました。

図書館・情報学専攻は、1951年にジャパン・ライブラリー・スクールとして設置されました。これは、図書館学を学ぶことのできる日本で最初の学科でした。その後、長く図書館・情報学を学問・研究両面で牽引してきました。日本国内で図書館・情報学を本格的に学べる場は限られており、本専攻はその数少ない選択肢の一つです。図書館・情報学の領域は多岐にわたり、図書館以外にも情報検索、情報行動、メタデータ、学術コミュニケーション、デジタルアーカイブ、書物学などの幅広い領域が含まれています。そして、図書館・情報学専攻は、文学部にありつつも、文理両面からのアプローチが可能な専攻です。今後の可能性に満ちた学問と言えるでしょう。



My Research

過去の作品が照らしだすもの

仏文学専攻［助教］

上杉 誠 Uesugi Makoto

専門領域：19世紀フランス文学
研究内容：19世紀フランス文学、とりわけスタンダールを対象に小説、伝記、自伝、旅行記、政治論、芸術批評といったジャンルの作品の読解に取り組んでいます。古代ローマ人、芸術家像、チチスベオの習慣、王政の原理、軍人の理想といった主題を通してあらわれる「名誉」の概念を取り上げながら、19世紀の作家たちが過去から継承した主題や理想をいかに変容させたのか検討しています。

妻の不倫を疑う夫がつぶやきます。「ふたりを殺してしまおう、法律はおれの味方だ。」これは、19世紀前半のフランスを舞台にしたとある小説のいち場面です。不倫をめぐる嫉妬や怒りの感情は今と変わらないかもしれません。けれども、法律も規範も常識もこの200年で大きく変化したようです。現在では自動車を指す«voiture»という単語が、馬車を指していた時代。現在とつながっているようだけれども、素直に理解できるわけではない。私たちと19世紀の間には、そんな距離があるのかもしれません。

私が研究対象として扱ってきた作家スタンダール（1783-1842）の作品は、恋愛や冒険など小説らしい心浮き立つ場面がたくさんありますが、細部に目を向けると首をかしげざるを得ない個所にも出会います。とくに私が困ったのは、人物の心理を表すのに「美徳」、「名誉」、「高邁」などモラルを示す言葉がしばしば用いられているのですが、その内実がよくつかめなかったことです。これらモラルの理想に注目しながら、旧体制（アンシャン・レジーム）から1789年のフランス革命を経て19世紀へと向かう時代の社会状況や価値観の変化を論じています。こうすることで、私たちがいま生きている社会の規範や常識を考えなおす手掛かりになるでしょう。

フランス語とフランス文学を専攻していま改めてよかったと思うのは、当初想像もしなかったものに出会えたことです。じっさい研究を通して、スタンダールが親しんでいたさまざまな作品、イタリア絵画やオペラ、ダンテやシェイクスピアといったお隣の各国文学、ホッブスやルソーの政治思想等々、関心は次々に広がりました。ある作品に触れることは、その背後にあるジャンルも異なる無数の作品への扉となるようです。そんな広がりは、物語を読んだり、美術館に行ったり、舞台芸術を見たりするたびに実感されます。作品を味わう喜びを、多くのかたと共有できたらと願っています。





My Research

感情をめぐる心と脳、身体の関係性

心理学専攻［准教授］

寺澤悠理 Terasawa Yuri

専門領域：認知神経科学、神経心理学、感情神経科学
研究内容：感情を感じるための心と脳、そして身体のシステムに関心を持っています。実験心理学やfMRIを用いた脳機能画像研究の手法とあわせて、臨床場面でも感情と思考・行動との関係性を検討し、複合的な観点からの研究を行っています。

嬉しい、悲しい、腹立たしい、といった感情は、誰かとコミュニケーションをしているときでも、あるいは一人で考え事をしている時でも、経験することができます。目の前にある状況や、将来の予測、あるいは過去の回想、そして現実感のない空想に対してさえも、私たちは心を揺さぶられ、その感覚を感情として理解しています。

それでは、感情はどのようにして心に浮かび上がってくるのでしょうか。そして、その個人差はどこから生まれるのでしょうか。私たちの研究室では、この疑問を心と脳、そして身体の働きの関係性から理解しようと試みています。強い感情を感じた時に同時に起こる心臓や呼吸などの活動の変化は、心の働きの結果として現れるだけでなく、これらの変化を感じること自体が、感情そのものの内容や鮮明さに影響を及ぼしている、という仮定のもと、心理学や心の動きに伴う脳活動を観察する認知神経科学の手法を用いて研究をしています。

具体的には、不安などの感情を感じやすい人や反対に自分の感情を感じづらい人は、感情に伴う身体反応の感じ方に特徴があるのか、またその特徴に関連する脳活動があるのか、といったことを調べています。このために、複数の自律神経活動を同時に計測する機械や、脳活動を観察するための機械などを使用することもあります。また、個人の感情の感じ方の特徴を質問紙や面接を用いて調べることもあります。最近では、身体反応の感じ方を変化させるトレーニングや、前述の脳活動の変化によって感情の感じ方や気分状態に変化が生じるのか、といった視点からの研究も行っています。

専門的な知識や研究手法を用いなくても私たちは、心と身体はつながっている、と直感的に信じています。この直感的な信念を、科学的な手法を用いて紐解き、心と身体の関係性についての理解を少しずつでも進めたいと考えています。





My Research

本州最北端 石灰岩洞窟における 挑戦的旧石器時代研究

民族学考古学専攻［教授］

渡辺丈彦 Watanabe Takehiko

専門領域：旧石器考古学、日本古代史、文化財行政学
研究内容：東北日本を中心とした旧石器時代の石材原産地遺跡や洞穴遺跡の調査・研究を通じて、過去の人々と周囲の自然環境との関わりを明らかにすることが主要な研究テーマです。さらに時代は新しくなりますが、古代瓦磚の研究を通して古代都城・官衙の成立・発展過程を考えることも研究テーマの一つです。また、遺跡の発掘調査や研究の成果を、一般の方々にわかりやすく伝えるための埋蔵文化財保護行政の仕組み作りにも関心があります。

世界的に高い水準にある日本の旧石器時代研究ですか、じつは日本最初の旧石器時代遺跡「岩宿遺跡」の発見当時から一つの大きな問題点を抱えています。それは遺跡でみつかる遺物の種類が後の時代に比べてとても少ないことです。最大の理由は、列島の地表の多くが火山灰起源の土に覆われていることにあります。火山灰は酸性なので、本来あったはずの骨や木などの有機質遺物が失われ、概ね石を材料とした石器のみしか残らないのです。世界的には、石以外の素材の各種道具（骨角器等）、旧石器時代人が入手した食料（動・植物）、旧石器時代人そのもの（遺骨）なども含めて総合的な研究を行うのが一般的なので、日本の旧石器時代研究は大きなハンディキャップを負っているといえます。

しかし、この厳しい状況を覆す遺跡がないわけではありません。その一つがアルカリ質の強い石灰岩が酸性土壌を中和する石灰岩の洞窟です。その洞窟を発見すること自体容易なことではありませんが、多様な遺跡出土資料に基き総合的に旧石器文化像を明らかにすることは、避けては通れない世界的な研究の流れです。この問題を解決するため、慶應義塾大学民族学考古学研究室は、1990年代後半から石灰岩地帯における洞窟の探査とその発掘という挑戦的な研究を続けています。

この取り組みは、岩手県北上山地の石灰岩洞窟から始まり、現在は本州島最北東端下北半島の尻労安部洞窟の発掘調査を手掛けています。幸いにして、尻労安部洞窟での挑戦は大きな成果をあげ、2008年には地表下4ｍの位置から旧石器が見つかり、翌年以降にはノウサギ、ヘラジカ、ヒグマなどの動物骨も続々とみつかりました。日本の旧石器時代遺跡は約1万か所ありますが、石器と動物骨が同時に出土した例は僅か5例にすぎません。この発見は、日本列島旧石器時代人の狩猟対象獣の種類を明らかにしたのみならず、その狩猟方法を具体的に考える上での大きな足跡を残しました。

Alumni Voice



細田ひかりさん

読売新聞グループ本社
社長室文化芸術企画部
国文学専攻
（2017年度卒業）

大きな問いにじっくり向き合える時間

── 現在のお仕事は？

私は新聞記者ではなく、イベントの仕事をしています。採用された事業局では、スポーツや美術のほか、コンサートからお芝居や落語のような伝統芸能まで、幅広く主催をしています。（※現在は事業局から出向中）

── 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

文学部の授業はあらゆる面で役に立っています。この仕事では、色々な方と接する機会が多いので、美術や文学、語学の知識や素養があるに越したことはありません。「それ、知っています」「授業で読んだことあります」と言えるだけで、話に花が咲き、信頼してもらえるようになります。

── 慶應義塾大学文学部の魅力とは？

17も専攻があり幅広いです。2年目から専攻を選べるため、1年目で仲が良くて、各専攻に分かれていった人たちと久しぶりに会うと、強みの異なる人が集う“アベンジャーズ”のように感じます。そうした楽しいコミュニティが自然と自分の周りにできていて、自分もその一員であるというのは、とても面白いです。

── 就職活動での文学部のメリットは？

カルチャーが好きな人が多いので、文学部生がよく行きたいと思う、広告、マスコミ、出版業界などを一緒に目指す仲間がいます。就職されているOBやOGの先輩も多いというのは、具体的なメリットだと思います。

── 文学部への進学を検討している方へ

文学部の4年間は、外国語が上達するとか、難しい本を読むとか、そうした勉強と同時に、「人間とは」「世界とは」といった大きな問いにじっくり向き合える時間です。後悔しないと思いますので、文学部にぜひ進学してみてください。

── 現在のお仕事は？

Cygamesでゲームマスターチームとして、リリースされているアプリの不正対策や分析を中心に業務を行っています。

── 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

文学部での学びが役に立ったと思うのは、上司への報告とか、会議のまとめとか、いろいろな場面で文章化を求められる時です。文学、社会学、心理学といった様々な分野での学びや、課題に取り組むことで得た文章構成力が、社会に出て、とても役に立っています。

── 慶應義塾大学文学部を選んだのは？

1年生の時は、教養科目として、数学、心理学、社会学など、いろいろな学問を学ぶことができます。専攻を選択するまでの1年間で、自分が本当に興味のある学問が何かを考えることができる。それがとても魅力に感じて、文学部を選びました。

── 就職活動での文学部のメリットは？

大学時代に一番やってきたことを聞かれますが、自分はやってきた研究をそのまま話して、評価されました。自分の好きを煮詰めた研究が文学部でできたこと、それを評価してもらえる文章力で書けたこと、それは文学部でしかできない経験だと思いますし、文学部で良かったと思っています。

文学部でしかできない経験



リョウさん

株式会社Cygames
英米文学専攻
（2020年度卒業）

── 文学部への進学を検討している方へ

「文学なんて将来性ないな」とは思ってほしくありません。実学を学ぶことは重要ですが、人間は何を考えてきたのか、どういう文化を培ってきたのか、どういう思想のもとで社会を形成してきたのか、それを知ることができるのが文学部です。それを踏まえて社会の一員として活躍できる人材になるという意味でも、文学部でできるような学びをしてほしいと思います。

山岡香央さん

株式会社ファンケル
総合研究所
心理学専攻
（2004年度卒業）



幅広い知識を得ることができる

── 現在のお仕事は？

私が所属している研究部門では、サプリメントや食品の有用性や機能性について、人を対象とした臨床試験を行っていて、機能性表示食品の届け出の際に使用するエビデンスなどを収集し報告することをメインの業務にしています。

── 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

研究所は理系の方が多くて、文系は私だけですが、心理学専攻で学んだロジカルシンキングや研究姿勢、1年次に学んだ幅広い知識などがベースとなって、今の業務に直接的に繋がっています。また、慶應義塾大学で培った人間関係が財産になって、今の私があると思っています。

── 慶應義塾大学文学部を選んだのは？

もともと、高校生の頃から心理学に興味があり、最初から心理学専攻に入るつもりで受験しましたが、特に慶應義塾大学の文学部に魅力を感じた点としては、1年次に幅広い知識を習得して、新たなスタンスで次のステップに進むことができる、というところです。文学部は、心理学専攻だけでなく、門戸が広いので、1年次に幅広い知識を得ることができるのは、大きなメリットだと思います。

── 文学部への進学を検討している方へ

まずは1年次に、知識を絞らず、いろいろなことにチャレンジすることです。勉学とか、人間関係とか、それ以外の活動でも、遊びのある1年という時間はとても重要です。そのうえで選択した専攻での気持ちも強くなります。そういう考え方をもっていれば、1年次で得た知識や経験は、とても役に立つと思います。2年、3年、4年、就職活動とか、卒業してからも、アカデミアに進んでも、いい形で皆さんの支えになります。

石井里奈さん

文化庁 政策課企画係
人間科学専攻
（2021年度卒業）



人の動きや社会の動きを学ぶ

── 現在のお仕事は？

文化庁政策課で、まさに日本中の文化行政に携わる仕事をしています。漫画やアニメから、文化財や著作権や日本語まで、私たちの身近にある文化に関わるものに広く関わっている部署です。

── 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

もともと学芸員に興味があったことで、文学部では学芸員の授業を取っていました。様々な博物館や美術館に足を運んで、どのような人たちがどのような作品をどのような表情で見ているかを研究したこともありました。そのことが、社会人になって、仕事として博物館や美術館の行政を考える際に、参考になっています。

── 就職活動での文学部のメリットは？

就職活動では、自分が社会にどう関わっていきたいのか、社会をどう変えていきたいのかということも問われると思いました。文学部では、社会学や人間科学を通して、人の動きや社会の動きを学ぶことができ、就職活動で、自分の体験したことや自分の感じていることがどういう理由で起きているのかをそのような観点から学問的に説明することができたと思っています。

── 文学部への進学を検討している方へ

慶應義塾大学文学部では、1年目で自分のしたいことが決まっていなくても、様々なことを勉強することができます。私は2年生で人間科学専攻に進んでからも、心理学の授業を受けることができました。慶應義塾大学文学部では、自分がどの専攻に進んでも、好きなことを学ぶことができます。その意味で、文学部には、幅広い学びの場が存在しています。皆さんもぜひ文学部に来ていただければ、卒業生として嬉しいです。

※所属は取材時のものです。

Philosophy

哲 学

幅広い領域を
普遍的な視点から研究

哲学は人類最古の学問のひとつです。しかし、実は哲学のその「古さ」は、つねに「新しさ」をも含んでいます。なぜなら、哲学をするとは、この世界に生きる誰もが感じ、多少とも疑問に思っているような事柄を、もう少し厳密にそして首尾一貫して考えてみようとする、人間の普遍的な衝動の発露にほかならないからです。つまり、哲学は普遍的であるからこそ、歴史的には他の学問に先んじて生じながらも、けっして古くさくなることなく、私たちにとってつねに新しくあり続けるのです。

哲学のこの古さと新しさ――哲学の普遍性――を体現するのが、まさに本専攻であると言えます。本専攻の伝統的な特徴は、最も古きものと最も新しきもの、つまり古典と現代という二極に教育・研究の軸を置きながら、普遍的な哲学的問題をめぐって両極が相互の理解と協力へと開かれているという点にあります。一方の、古代哲学から中世哲学までの古典研究においては、ギリシア語、ラテン語が飛び交い、哲学の原点にある諸問題が議論されながらも、現代の哲学的状況にとっての意義がつねに問題とされます。他方の、20世紀以降の現代哲学研究においても、論理学、分析哲学、科学哲学、現象学それぞれの最先端課題が追究されながら、他方ではつねにその哲学的意義、つまり哲学的な根本性が、古典研究に照らして問い質されているのです。



アリストテレス『著作集』
（ヴェネツィア：1477年刊）



「ドゥンス・スコトゥス『任意討論集』」
（ヴェネツィア：1495-1498年刊）

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
荒畑　靖宏	教　授	現代ドイツ語圏の哲学、哲学的論理学
上枝　美典	教　授	西洋中世哲学
柏端　達也	教　授	行為論、現代形而上学
近藤　智彦	准教授	古代ギリシア・ローマ哲学、西洋古典学
田中　泉吏	准教授	科学哲学
平井　靖史	教　授	時間と心の哲学、記憶の形而上学、 ベルクソンおよびライプニッツを中心とする近現代哲学
峯島　宏次	准教授	言語哲学、論理学、意味論・語用論

Ethics

倫理学

思想を通して「人間の生き方」を考える

倫理学は、「人はどう生きるべきか」を問おうとする学問です。グローバル化の著しい進展により従来の価値観が揺らぐ現代において、誰もこの問いを避けて生きることはできません。倫理学専攻では、この問いに答えるためのさまざまな理論的枠組み（義務論や功利主義、正義論、徳倫理学、自然法論、メタ倫理学など）を学び、倫理学の一次文献を自ら読み解く技術を身につけることができます。

慶應義塾の倫理学専攻には6人の専任教員がいます。伝統的に、近現代のドイツ・フランス・イギリスの倫理思想とその歴史を専門領域とする教員が多いのですが、それ以外の領域についても多くの科目を開講し、学生の幅広い関心に対応しています。現代の社会問題を問い直す応用倫理学（生命倫理学や環境倫理学、情報倫理、ビジネス・エシックス、グローバル・エシックスなど）や、キリスト教を中心とした宗教思想、法・政治思想の研究や教育にも力を入れています。



アテナイの学堂



フランス人権宣言



イエス像

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
荒谷　大輔	教　授	哲学、倫理学
石田　京子	准教授	ドイツ倫理思想、法哲学
エアトル, ヴォルフガング	教　授	倫理学史、形而上学、現代倫理学
柘植　尚則	教　授	イギリス倫理思想史
奈良　雅俊（哲龍）	教　授	現代フランス哲学、医療倫理学
村上　暁子	助　教	現代フランス思想・実存思想と宗教思想

Aesthetics and Science of Arts

美学美術史学

古代から現代まで
古今東西の「美」を学ぶ

美学・芸術学、美術史学、音楽学、ならびにアート・マネジメントを主要な研究領域とします。美学・芸術学とは、主に芸術一般における制作・作品理解をめぐる諸問題を理論的に考察する学問です。概論や各論のほか、近現代の諸芸術メディアにみられる様々な問題が扱われます。美術史学とは、西洋および日本・東洋の各時代における絵画、彫刻、工芸、建築等の実証的・歴史的研究を行うものです。美術の通史をとりあげる概説と、国や時代別の多様な美術を扱う各論の講義があります。音楽学は、作曲家とその作品、それらをとり巻く様々な事象を歴史的・理論的に研究する学問です。西洋音楽の概説と各論のほか、日本の近現代音楽や伝統音楽に関する講義も開講されています。アート・マネジメント分野では、芸術組織の経営の問題のほか、文化政策、文化経済学、非営利組織論についても学習します。

以上の専門研究の基盤として、芸術研究基礎・演習、原典講読などの入門講義が用意されています。なお、3・4年生は研究会に所属し、卒業論文の作成指導を受けることが必須です。



遠山ゼミの様子



日本美術作品の調査実習



美美旅行

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
金山　弘昌	教　授	西洋美術史
後藤　文子	教　授	西洋美術史
佐々木康之	准教授	日本美術史
遠山　公一	教　授	西洋美術史
内藤　正人	教　授	日本美術史
中尾　知彦	教　授	アーツ・マネジメント
西川　尚生	教　授	音楽学、西洋音楽史
福田　　弥	教　授	音楽学、西洋音楽史
望月　典子	教　授	西洋美術史、芸術学

Japanese History

日本史学

日本史を通じて
人間の営みと社会の動きを考える

日本史学専攻では、歴史学を中心として広くさまざまな分野の学問の方法を学びつつ、通時代的な歴史像の把握に向けて日本史全般に関する知識の修得に努めます。また、史料から歴史情報を引き出すための基礎的能力を養うとともに、その成果を論理的に構成して発表することができる能力を磨きます。

日本の歴史に対する理解を通じて培った、人間の営みと社会の動きに対する視野と洞察力を併せ持つことで、社会人、研究者、教育者として、社会に対する独自の貢献ができる人物を育成します。

日本史学専攻には、古代から近代まで、合わせて7人の専任教員がおり、キリシタン史を含め特色のある研究・教育を行っています。学生は古い時代から新しい時代まで、また方法論的にも多面的に学習することができます。



京都・二条家の簿冊の山



資料整理の様子



秋田藩城内での百姓の酒宴

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
浅見　雅一	教　授	キリシタン史、中国天主教史
上野　大輔	准教授	日本近世史
小山　幸伸	教　授	近世・近代日本の社会経済史
十川　陽一	准教授	日本古代史
中島　圭一	教　授	日本中世史
藤本　　誠	准教授	日本古代史
前田　廉孝	准教授	近代日本経済史・経営史、日本植民地経済史、歴史経済学

Asian History

東洋史学

アジア、中東・イスラーム世界を歴史的に捉える

東洋史学専攻では、アジアおよびイスラーム世界を中心とする地域の政治・経済・社会・文化および国際関係を歴史的に捉えて、人々の多様な価値観を理解する力を養います。この地域に関するユニークなテーマを見つけて、学術的な研究文献や一次資料を読み解き、論理的に考察して表現することを目指しています。

アジア・イスラーム世界や歴史学に対する興味を多様な進路につなげていくことができますが、在学中に培った外国語の能力を活かして、国際社会で活躍したり、国際交流の分野に貢献したりする道も開かれています。

東洋史学専攻には、中東・イスラーム世界および東アジアを専門とする5人の専任教員がおりますが、そのほかの地域に関する授業も豊富に設置されており、また近現代・近世・中世・古代のいずれの時代も専門的に勉強することができます。



エジプト最南端の町アスワーンで
ナイル川を臨む



イスタンブルのスレイマニイェ・モスク



上海の洋食レストラン・徳大西菜社
（1897年創業）

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
岩間　一弘	教　授	東アジア近現代史、食の文化交流史、中国都市史
勝沼　　聡	准教授	近現代中東社会史、アラブ近現代史
五味　知子	准教授	明清社会史、中国ジェンダー史
長谷部史彦	教　授	中東社会史、アラブ都市史、地中海交流史
藤木　健二	教　授	オスマン帝国史、中東都市社会史

Western History

西洋史学

現代の「国際社会」を構成する多様な価値観を理解する

古代から現代までのヨーロッパやアメリカなどいわゆる西洋世界と、そこから強く影響を受けた地域の過去を学ぶことを通して、現代の「国際社会」を構成する多様な価値観を理解する力を持った社会人、教育者、研究者を育成します。そのために、自ら情報を収集し、それを学問的に分析するために必要な外国語力と、学問の方法論を身につけることに重点を置いています。

外国語の習得には特に力を入れており、2年次と3年次の必修科目において、英語と、英語以外のヨーロッパ言語で専門書を読む力を鍛えます。また、3年次から2年間連続して履修するゼミと、卒業論文の執筆を通して、語学力と方法論を実践的に運用し、主体的に資料を集め、理論的に考察し、論文にまとめあげる総合力を身につけられるように指導します。

多様な地域や時代を専門とする専任教員の存在に加え、幅広いテーマを対象とした非常勤講師による授業も数多く開講しており、多様な地域の歴史や文化を学ぶことができるのも特徴です。



スペイン内戦の弾痕が残る教会



南仏ニームのメゾン・カレ



18世紀の手稿史料

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
赤江　雄一	教　授	西洋中世史
清水　明子	教　授	ドイツ現代史・ユーゴスラヴィア史
舘　　葉月	准教授	フランス現代史、国際関係史
野々瀬浩司	教　授	スイス宗教改革史、農村社会史
長谷川　敬	准教授	古代ローマ史（社会経済史）
山道　佳子	教　授	スペイン（カタルーニャ）近代史

Archaeology and Ethnology

民族学考古学

文献のみならず多様なモノを資料に歴史を研究

文献のみならず、多様なモノを資料に歴史を研究する専攻です。現在、専攻が所蔵する資料・標本類は国宝や重要文化財も含めて20万点以上。それらは大正期より幾多の発掘・民族調査が重ねられた結果、収集されたものです。専攻生はそれら貴重な資料を研究対象とし、専任教員が国内外で展開する調査に参加することもできます。フィールドワークを重視し、また扱う地域・時代に制限を設けない当専攻には、考古学・民族学・人類学の概論科目や調査に必要な方法論・技術を学ぶ科目、日本、北アジア、オセアニア、オリエント、ヨーロッパに至る多様な地域を扱う民族学・考古学の専門科目など多岐に亘る科目が設置されています。専任教員を通して、言語文化、建築史、生態学、文化人類学といった関連領域との幅広い連携も経験できます。これらの科目や経験から多様な知識を得、フィールドワークで観察力と対話力を養い、また研究会で発表を重ね、卒業論文を仕上げる中、社会人に等しく必要な論理的思考力とプレゼンテーション能力も習得します。



展示実習の様子



発掘調査（尻労安部洞窟）



ウリ像（ニューアイルランド島）

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
安藤　広道	教　授	日本考古学・博物館学
佐藤　孝雄	教　授	動物考古学、民族考古学
志村　真幸	准教授（有期）	比較文化、民俗学、南方熊楠研究
三木　健裕	助　教	西アジア考古学、南アジア考古学、先史考古学、考古学理論、土器の学際的研究
山口　　徹	教　授	オセアニア島嶼世界のジオ考古学、歴史人類学、博物館人類学
渡辺　丈彦	教　授	旧石器考古学、日本古代史、文化財行政学

Japanese Literature

国文学

言語、文芸をはじめ日本の文化全般が研究対象

国文学専攻は、国文学および日本語学を中心に、学芸、習俗など広く日本文化の歴史と現在について専門的に学ぶ専攻です。

本学国文学専攻の文学研究の一大特色は、書誌学などを基礎とする実証的で厳密な研究方法にあります。日本語についてもその言語としての諸側面を理論的・体系的・実証的に学ぶことができます。

そうした学問的な厳格さは保ちながらも、自由な雰囲気のもと固定観念や偏見にとらわれない柔軟な見方で、広く学び深く考えてゆこうというのが、本学国文学専攻の伝統的な雰囲気です。

単なる物知りではなく、みずからの問題意識に基づいてテーマを設定した上で、独力でデータ・資料を収集し、論理的な分析・考察を行って課題を解決して、自分のことばで発表できる人材の養成を目指しています。そうした能力を社会に出てから直面する多様な問題・課題を解決するために活用でき、生涯、学習を継続する姿勢を保つ、自立した責任ある社会人・教育者・研究者を育成してゆくことが本専攻の目標です。



やひやうゑねすみ（弥兵衛鼠）





小村雪岱画稿



後鳥羽院御口伝

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
石川　　透	教　授	物語文学、説話文学
岡田　一祐	准教授	日本語文字・表記史、デジタル人文学
小川　剛生	教　授	中世文学、和歌文学
小平麻衣子	教　授	近代日本文学
栗本賀世子	准教授	中古文学
恋田　知子	准教授	中世文学
合山林太郎	教　授	日本漢文学（近世・近代）

Chinese Literature

中国文学

中国の伝統的文化を学び 現代中国の動向にも向き合う

中国文学専攻では、日本に大きな影響を与えた中国の伝統的文化を学ぶと同時に、現代中国の動向にも向き合う姿勢を重視しています。

「中国語学」「現代文学」「古典文学」を三本柱としつつも、いわゆる「文学」の枠組みにとらわれず、歴史・思想・芸能などを含むあらゆるジャンルを研究の対象としています。近年では台湾を含めた現代社会や映画・サブカルチャーを研究対象にする学生も増えています。

様々な研究や活動のためには、現代中国語のスキル向上が必須です。そのために、各学年に文法・読解中心の科目と、ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の科目を設置し、効率的なカリキュラムを構築しています。

欧米とは異なるスタンダードを有する中国と向き合うことで、世界を見つめ、日本のあり方をも見つめる新たな視座を獲得できるはずです。中国文学専攻では、古典から現代まで時代・分野を問わず、躍動する中国に関心を持つ学生を歓迎します。



敦煌・莫高窟



四庫全書



李白

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
浅野　雅樹	教　授	中国語学
杉野　元子	教　授	中国近現代文学、日中比較文学
須山　哲治	准教授	中国古典文学
丁　　雷	准教授	中国語教育、音声学（中国語）、中国語学
松倉　梨恵	助　教	中国現代文学
吉永　壮介	教　授	中国古典文学

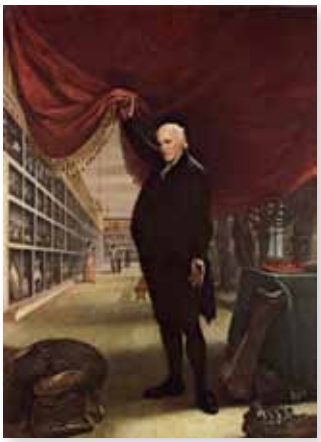
English and American Literature

英米文学

英米の文化・言語を幅広く学ぶ

英米文学専攻の扱う領域は、英語という言語自体から英語によって築かれた文化一般にいたるまで広範囲におよびます。英語運用力といった基礎的な技能は、言語や文化をより深く理解するための一手段として位置づけられることになります。

当専攻では、戦前から野口米次郎（イサム・ノグチの父）、戸川秋骨、西脇順三郎（ノーベル文学賞候補）、厨川文夫といった先達によりアカデミズムを重視する学統がつちかわれてきました。この伝統を受け、現在も学生の広く深い関心に対応できるよう、種々の教授陣および多岐にわたる講義を用意しています。中世から現代にいたる英文学に関する講義・演習、植民地文学からポストモダン文学にいたる米文学に関する講義・演習、古英語から現代の言語学研究にいたる英語学に関する講義・演習、さらに映画や音楽などの欧米文化と文学との接点を多角的に取り上げた学際的講義など、日本でも類を見ないほどの充実したカリキュラムによって、学生の興味はさらに広がっていくと確信しています。



博物館の芸術家（チャールズ・W・ピール）



受胎告知
（15世紀後半制作写本の細密画）



機を織る聖母マリア
（15世紀制作写本細密画）

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
井口　篤	准教授	中世英文学 （14-15世紀のラテン語・中英語宗教散文）
井出　新	教　授	初期近代イギリス文学・演劇
井上　逸兵	教　授	英語学・社会言語学・談話分析
大串　尚代	教　授	アメリカ文学、ジェンダー研究
大鳥由香子	准教授	歴史学、アメリカ研究、子どもの歴史、リーガル・ヒストリー 法と人文学
加藤有佳織	准教授	アメリカ文学、カナダ文学
コミサロフ，アダム	教　授	異文化コミュニケーション、異文化適応
坂本　光	教　授	近現代イギリス文学
佐藤　光重	教　授	アメリカ文学
高橋　勇	教　授	近現代イギリス文学、ファンタジー文学
高橋　宣也	教　授	近代イギリス文学
辻　秀雄	准教授	アメリカ文学
徳永　聡子	教　授	中世イギリス文学、書物史、書誌学
バナード，ピーター	准教授	日本近代文学、比較文学、幻想文学、ゴシック論
原田　範行	教　授	近現代イギリス文学、比較文学、出版文化史、文学教育論
辺見　葉子	教　授	中世イギリス文学、ケルト語文学、トールキン
細野　香里	助　教	19世紀アメリカ文学・文化
堀田　隆一	教　授	英語史、歴史言語学
若澤　佑典	助　教	18世紀イギリスの文学・文化、スコットランド啓蒙思想、会話／対話としての哲学

German Literature

独文学

ドイツ語圏の文化を領域横断的に研究

独文学専攻の対象は「ドイツ」にも「文学」にも限定されません。ドイツ、オーストリア、スイスの言語と文学を中心に、映像、舞台、美術、音楽、思想、歴史、政治、建築、メディアなど、ドイツ語圏の豊穣な文化全般を扱うのが当専攻なのです。

独文学専攻のカリキュラムは、ドイツ語母語話者2名を含む9名のスタッフのもとで、ドイツ語運用の四技能(「読み」・「書き」・「聴く」・「話す」)がバランスよく修得できるよう設計されています。学生は、そのスキルを駆使してドイツ語圏の文化を広く、また深く学び、4年次にはその中から関心のあるテーマを選んで探究し卒業論文に結実させます。在学中に留学をする学生も少なくありません。

独文学専攻の淵源は、慶應義塾ではじめて「独文学」が講じられた1910年に溯ります。以来、当専攻は意欲と知的好奇心に富む学生たちを迎えてきました。教員と大学院生や学部生の間の関係が密で、コンパや合宿や読書会など、交流の機会が豊かであることを良き伝統の一つです。卒業生たちの進路はドイツ語圏の知識を生かす職種の他、通信、出版、製造、金融、ITなど社会の広い分野に開かれています。



ブレーメンの音楽隊



フリッツ・ラング『メトロポリス』



ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
片山由有子	助　教	中世ドイツ文学、キリスト教女性神秘思想
川島建太郎	教　授	現代ドイツ文学・思想、メディア理論
粂川麻里生	教　授	近現代ドイツ文学、文化史、スポーツ史、ポピュラー音楽、怪獣映画
佐藤　恵	助　教	歴史語用論、ドイツ語史
田中　愼	教　授	ドイツ言語学、言語理論
西尾　宇広	准教授	近代ドイツ文学
平田栄一朗	教　授	演劇学・ドイツ演劇
ベッカー, アンドレアス	訪問准教授(招聘)	映画、メディア学
ヨッホ, マルクス	教　授	近現代ドイツ文学・文化学

French Literature

仏文学

広汎なフランス語文化研究を きめ細やかに指導

仏文学専攻では、フランス語およびフランス文化を通じて、学生諸君が社会的・文化的事象を多角的にとらえる能力と、高度で実践的な語学力を身に着けることを目指しています。

フランス滞在を終えた永井荷風が慶應義塾に就任し、私たちの専攻が実質的に誕生したのは1910年のことでした。以来百年以上にわたって、文学・芸術の分野にとどまらず、メディア、通信、実業界など、さまざまな世界で活躍する人材を輩出しています。

当初は小さな組織だった本専攻も、現在では、さまざまな分野や時代をカバーする10名以上の専任スタッフを揃えるに至りました。狭い意味でのフランス語学・文学の領域にとどまらず、思想、社会、歴史、食文化やモード、映画や舞台芸術、美術、音楽、ネット時代のメディア等、学生諸君の幅広い関心に応えられる組織となっています。

在学中に留学する学生が多いのも私たちの専攻の特徴です。慶應義塾では高等師範学校、パリ第3大学など数多いフランスの大学、さらにスイスのジュネーヴ大学、カナダのモントリオール大学などと交換協定をもっており、当専攻からは特に多くの在学生がこれらの留学制度を利用しています。



専攻の大先輩、遠藤周作の学んだフランスの古都リヨン



知の集大成、
フランス国立図書館



ノルマンディ地方カーン近郊にある
現代出版記憶研究所（IMEC）

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
芦野　文武	准教授	発話意味論、語彙意味論（フランス語、日本語）
市川　　崇	教　授	現代フランス文学及び思想
井上　櫻子	教　授	18世紀フランス文学・思想
上杉　　誠	助　教	19世紀フランス文学
大嶌健太郎	助　教	近代フランス文学（マルセル・プルースト）
片木　智年	教　授	おとぎ話論、17世紀フランス文学・演劇
喜田　浩平	教　授	フランス語学
竹中　公二	助　教	16世紀フランス文学
築山　和也	教　授	19世紀フランス文学
西野　絢子	准教授	現代フランス文学・日仏演劇交流
ブランクール,ヴァンサン	訪問教授（招聘）	フランス文学
岑村　　傑	教　授	近現代フランス文学

Library and Information Science

図書館・情報学

日本における図書館・情報学の研究、教育のパイオニア

図書館・情報学専攻では、個人や機関により生産された経験や情報、知識について、その流通、組織化、提供、利用、保存といった諸側面の基本的な知識と、情報の視点から問題を発見し自ら解決できる能力の習得をめざします。

前身である図書館学科は、1951年米国の援助のもと日本で最初の大学における図書館員養成機関として設立されました。ロバート・ギトラーは、設置大学の選考に際して、英訳福翁自伝に感銘を受け慶應義塾大学を選んだとされています。当初は5名の米国人教授、米国人司書による全て英語の授業で、通訳がついていました。

その後、図書館学だけでなく、さまざまな記録情報を扱う情報学も含めた図書館・情報学へと対象を拡大し、大学院も充実させて来ました。現在は図書館コース、情報メディアコース、情報管理コースの3コース制のカリキュラムをとり、図書館界に多くの優秀な人材を送り出すとともに、情報から人間と社会を考える能力を持つ人材を広く社会に送り出しています。日本における図書館・情報学の教育、研究のパイオニアとしての地位を築いてきました。



地理的データによる公共図書館の分析



論文における慶應義塾大学と共著機関の分析



埼玉県立図書館がん情報コーナー



グーテンベルクの
印刷工房の想像図

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
安形　麻理	教　授	書誌学、書物史、図書館・情報学
池谷のぞみ	教　授	エスノメソドロジー、情報行動、知識の社会学、サービスデザイン
岸田　和明	教　授	情報検索、テキストマイニング
永崎　研宣	教　授	人文情報学、仏教学
福島　幸宏	准教授	図書館情報学、アーカイブズ、デジタルアーカイブ、日本近現代史
松本　直樹	教　授	図書館・情報学
宮田　洋輔	助　教	図書館・情報学
和気　尚美	助　教（有期）	図書館・情報学

Sociology

社会学

社会や文化に対する広い視野と深い洞察を育む

社会学専攻で学ぶということは、古今東西の多様な文化と社会に言及しつつ、現代社会の諸々の問題にとり組むことであり、そうすることで、人間を総合的に理解して、私たちの生を自ら作ることにつなげるということです。

社会学専攻には社会学とともに、社会心理学と文化人類学などの領域が含まれています。この三つの学問分野を横断的に学ぶことが他大学の社会学専攻と大きく異なる特徴です。これら三分野の概論や社会調査、社会学史は必修科目になっています。そして、それを土台にして、自分自身の研究の方向性やスタイルをどのように作るのかが大事になります。その自由度は高く、そのための多様な科目が設置されています。

もしみなさんが、時代の変化に目を向けるとともに、社会や文化の各分野に対する広い視野と深い洞察力を育み、自主的で積極的な学習態度を身につけようとするならば、単なる知識ではなく、フィールドでの具体的な実践をも網羅する社会学の学習が可能になります。



ノーベル賞を受賞した社会学者ジェーン・アダムス



世界で最初の社会学的実験室
（イギリス・エジンバラ）



渋谷交差点

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
李　光鎬	教　授	メディア・コミュニケーション研究、普及研究、社会心理学
小倉　康嗣	教　授	生の社会学、ライフストーリー研究、記憶と継承の社会学
樫尾　直樹	准教授	文化人類学、宗教社会学、宗教学
木下　衆	准教授	医療社会学、社会調査法、家族社会学
阪井裕一郎	准教授	家族社会学・歴史社会学
杉浦　淳吉	教　授	社会心理学、環境行動論、リスクコミュニケーション、ゲーミング
近森　高明	教　授	文化社会学、都市社会学、歴史社会学
三尾　裕子	教　授	文化人類学、東アジア研究
森川　剛光	教　授	社会学理論、社会学史、社会科学の哲学、知識社会学、文化社会学、世界社会論

Psychology

心理学

厳密な実験と徹底的なデータ分析による実証研究

慶應義塾の心理学研究室は、創設者横山松三郎君のもとで1926年3月に実験室が開設され、1928年には文学部の正式な専攻となりました。

戦後、1951年に大学院（社会学研究科心理学専攻）、1952年には動物実験室、同時期に日吉キャンパスの研究室も開設され、これまでに多くの卒業生、研究者を輩出しています。

その歴史の中で研究室、実験室の移転やカリキュラムの改変を幾度か経ていますが、その研究・教育の理念の中心に厳密な実験と分析を基盤とした徹底的な実証研究による心理の探究があるという点は創設時から一貫しています。

現在は知覚・行動・学習・認知・発達・生物・神経心理等の諸領域にわたる研究・教育をおこなっており、実験科学的なアプローチを用いているという点で文学部の中でも独特な専攻となっています。



頭の認識を調べる心理学実験



オペラント箱を用いた動物実験



脳波測定実験

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
板口　典弘	准教授	実験心理学、認知神経心理学、計算論的運動制御
梅田　　聡	教　授	認知神経科学、神経心理学、生理心理学、認知心理学
大森　貴秀	助　教	発達心理学
川畑　秀明	教　授	感性科学、認知神経科学、実験心理学
北　　洋輔	准教授	臨床発達心理学、障害科学、認知神経科学
寺澤　悠理	准教授	認知神経科学、神経心理学、感情神経科学
兎田　幸司	准教授	学習心理学、行動神経科学、行動薬理学、比較認知科学、感性認知脳科学
皆川　泰代	教　授	言語心理学、発達心理学、認知神経科学

Education Studies

教育学

「人間形成」に関わる営為全般を視野に含めながら教育の本質を探究

教育学は、18世紀後半期以後の西洋先進諸国における近代学校制度の整備・確立を背景として成立・発展しました。今日でも、教育学は、各大学の教職課程に組み込まれている教科教育学や教育方法学などに代表されるように、一般的には教員養成や学校教育への貢献を目的とする学問として理解されています。

それに対し本専攻では、「人間形成」に関わる様々な営為全般を視野に含み込みながら、教育の本質を探究しています。それぞれの時代や社会における人々の生の営みには、学校教育の枠組みからは溢れ出てしまうような多彩な人間形成の営為が埋め込まれています。それらを再発掘し再評価することで、教育的営為や教育的知見の豊かな可能性を探究している点に本専攻の最大の特色があります。またその探究を、人文科学や社会科学はもとより、自然科学の方法をも駆使しながら展開している点にも本専攻の独自性があります。こうして「教育」を包括的な人間形成の関心に立って理解することで、学校教育の問題にも、より多角的で重層的なアプローチを提供できると考えています。



教育史散歩
慶應義塾発祥の地を訪ねる



教育測定実験Ⅰ



幼児向け発達検査実習場面

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
綾井　桜子	教　授	フランス教育史、教育思想史
川口　　純	准教授	比較教育学、国際教育開発論
川本　哲也	助　教	パーソナリティ心理学、教育心理学
藤澤　啓子	教　授	発達心理学
眞壁　宏幹	教　授	陶冶理論（人間形成論）、教育思想史
山梨　あや	教　授	日本教育史、社会教育史
渡邊福太郎	准教授	教育哲学、教育思想

Human Sciences

人間科学

社会の中の「人間」を多面的に把握する

社会的・経済的・文化的な環境変化の波によって、私たちの生命観、人間観、倫理観は常に揺さぶられています。固定した知的枠組みでは捉えきれない複雑な様相が、現代社会には内包されています。グローバリゼーション、経済・情報格差、大規模自然災害、情報技術、遺伝子操作など多種多様な問題がからみ合って、人間の感性、価値観、ライフ・スタイルが大きく変貌し多様化しつつあるのです。このような社会にあって、人間科学専攻の使命は、社会、文化および自然をめぐる諸問題の理解と解決を志向して、人間性の多元的把握と、そのための新しい知的枠組みを、学際的視野から構築・探究することです。

2年次は人間科学の基礎を学び、3年次からは特定の分野を専門的に学ぶための研究会に参加することができます。4年次は研究会に所属して卒業論文に取り組むコースと、卒業試験を受けるコースのいずれかを選択します。卒業後の進路は、就職（一般企業、マスコミ、教員、官公庁）から大学院進学まで多方面にわたっています。時代の変化に好奇心を向け、人間の問題を掘りさげて考えようとする学生を歓迎します。



アフリカでのフィールドワーク



実験室の様子



調査データ

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
稲葉　昭英	教　授	計量社会学、社会統計学、社会調査法、家族社会学、福祉社会学
上島　淳史	助　教	社会心理学
織田　輝哉	教　授	理論社会学、数理社会学、計量社会学
北中　淳子	教　授	医療人類学、精神医学史
佐川　　徹	准教授	人類学、アフリカ地域研究
菅　さやか	准教授	社会心理学
常松　　淳	教　授	社会学
平石　　界	教　授	進化心理学、社会心理学

Natural Sciences

自然科学

諸科目を通じて自然科学の論理的な考え方を学ぶ

自然の一部である人間の理解には、生物的な存在としての人間、物質的な存在としての人間、人間を取りまく地球環境、さらには、この地球を含む宇宙の理解も不可欠です。したがって、生物学、物理学、化学を、それらの具体的な理解に不可欠な実験と共に学ぶことは極めて有益です。さらに、数学、天文学、地学、人類学、心理学と多様な自然科学系列の諸科目を通して自然科学の論理的な考え方を学ぶことは、文学部のどの専攻にあっても、自然科学の豊かな教養と柔軟な思考力が役立つはずです。

日吉1年次には、実験系科目と講義系科目が、三田の2年次以降には講義系科目が自然科学系列科目として開講されています。卒業までに8単位以上の取得が必要です。この他に、1年次には総合教育セミナーが、2年次以降には、自然科学研究会が開講され、より専門的かつ実用的な自然科学の知識、考え方が学べます。



化学実験



人類学実習



生物学実験

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
岡本　昌樹	教　授	触媒化学、多孔体材料
小畠　りか	助　教（有期）	天然物化学
倉石　　立	准教授	発生生物学
河野　礼子	教　授	自然人類学、人類進化学
田口　瑞姫	助　教（有期）	発生生物学、免疫生物学
古川　亮平	准教授	発生生物学、免疫生物学

Foreign Languages

諸言語

文学部の各専門を補い、知識や理解を深める

グローバル化により世界の一体化が急速に進行している現代では、複数の外国語の習熟と、その背景にある文化・社会・歴史等についての相互理解が要求されます。これからの時代を担う学生に、できるだけ広い範囲の言語と文化を修得してもらうために、文学部には17専攻以外に諸言語部門が設置され、日吉から三田へと徐々にステップアップして各言語が学べるようになっています。

具体的には、ローマ帝政下のギリシア語散文文学を研究しているギリシア語・ラテン語教員、朝鮮半島（家族の変容・徴兵制）や日本（在日コリアン・漁民）をフィールドとして研究している韓国語教員、スペイン語圏の文学（バスク語文学）と文化を研究しているスペイン語教員、ダンテを始めとするイタリアの古典文学、ギリシャ神話などを広く追求しているイタリア語教員、ロシア文学とロシア文化史を専門とするロシア語教員がいて、文学部の各専門を補い、知識や理解を深めてくれます。また、諸言語部門の教員が、17専攻では扱わない研究分野の授業を三田で開講しています。



スペインの前衛詩運動ウルトライスモの詩の一例

古代ギリシア恋愛小説『レウキッペーとクレイトポーン』の16〜18世紀の様々な刊本



ソウルでのアンケート調査

スタッフ紹介

氏　名	職　位	専門領域
金子　奈美	助　教	スペイン語圏の文学・文化、バスク語文学
金　　柄徹	教　授	韓国語、文化人類学
越野　　剛	准教授	ロシア文学・文化史
小林　　薫	准教授	西洋古典学
原田亜希子	助　教	イタリア史
諸星　　妙	助　教（有期）	スペイン美術史

Graduate Schools

〔大学院〕 文学部は1学科17専攻と2部門から成っていますが、大学院は文学研究科と社会学研究科に分かれます。



知のさらなる深みをめざして

文学研究科

Graduate School of Letters

―知の探求者として

文学研究科は、慶應義塾のなかでも最も古い研究科のひとつとして、人文学諸分野の研究に大きな貢献をしてきました。現在は哲学・倫理学、美学美術史学、史学（日本史学・東洋史学・西洋史学・民族学考古学の4分野）、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学、図書館・情報学の9専攻から成り、広く人文学全体をカバーして最高水準の専門研究を国際的に展開するとともに、修士課程独自のプログラムとして、アート・マネジメント、情報資源管理、日本語教育学の各分野では、高度な専門知識を備えたプロフェッショナルを養成しています。近年では専修教員免許の取得や学芸員資格等をさらに活かすために進学を希望する人も増えています。

修士課程及び後期博士課程の授業の大半は少人数の演習科目で、半期を単位として履修できるので、各自の専門的興味を反映した柔軟な履修計画をたてることが可能です。論文の指導教授以外にも、文学部の専任教員の多くが大学院科目を担当しており、さらに全学的な「スーパーグローバル事業」の一環として、海外から著名な研究者を博士課程の学生の副指導教授として招聘することもあります。三田キャンパスには人文学分野のさまざまな研究所だけでなく、和漢洋の貴重書を数多く所蔵する慶應義塾図書館や斯道文庫があり、これらの機関と連携して歴史資料や貴重書を活用した研究や方法論を学ぶ環境も整っています。

学生の研究テーマに密着した丁寧な指導とキャリア支援は、文学研究科の一番の特色であり、少人数セミナーと個別の論文指導を通じて、学生は専門研究を深め、その成果を国際的に発信しています。海外の研究機関との交流も活発で、共同でのセミナーや海外研究者による講演会も毎月のように開催されています。

入学試験は修士課程が年2回（9月と2月）、後期博士課程が年1回（2月）おこなわれ、募集人員は修士課程が1学年135名、後期博士課程は45名となっています。

社会学研究科

Graduate School of Human Relations

―「知の新たな生産者」の育成を目指して

社会学研究科は文学部人間関係学系の四専攻（社会学、心理学、教育学、人間科学）と経済学部・法学部・商学部・環境情報学部、メディア・コミュニケーション研究所・教職課程センターの専任教員が研究と指導を行う学際的な独立大学院で、社会学・心理学・教育学の三専攻から成っています。いずれの専攻においても、さまざまな文献を通じて既存の研究成果を学び、かつ、調査研究を着実に行うための理論や調査・分析方法を体系的に修得することになります。さらに、現代社会の問題の解明に取り組むべく、知的流行を批判的に摂取しながらも、新たな角度から社会を分析する力を持つ研究者、換言すれば、「知の新たな生産者」を養成することもつねに意識し大学院教育を展開しています。

そのために社会学研究科では、三専攻にまたがった科目の設置、文学研究科との共同研究を推進するためのプロジェクト科目の設置、院生の共同指導体制の確立などによって、領域横断的な研究教育体制を積極的に進めています。また、海外の大学との研究協定締結（Ex.ウィーン大学）やダブル・ディグリープログラム協定の締結（Ex.修士課程：ハレ・ヴィッテンベルク大学、博士課程：南オーストラリア大学）、海外特別招聘教授による集中講義などを通して、研究教育体制の国際化を強力に推進しています。

卒業後の進路は、大学の研究者や中等教育機関の教員になる者のほか、公務員、シンクタンク、研究所、福祉関係、広告業、マスメディア等さまざまで、海外の大学・研究機関に留学をする者も少なくありません。

入学試験は年1回、定員は修士課程が1学年40名、後期博士課程は11名です。教育学専攻修士課程では、現職教員を対象とした入学試験も実施しています。

〔研究所〕

多彩な研究所設置講座



慶應義塾大学には、学部・研究科以外の幅広い活動の場として研究所・附属施設が多数設置されており、従来の学問領域にとどまらない柔軟な研究環境を構築しています。この中から文学部と関連の深いものを紹介します。多くの研究所には設置講座があり、所属専任・関連教員が、学生を指導しています。詳しい内容については、各ホームページ等を参照してください。

アート・センター

慶應義塾唯一の芸術を専門研究領域とする研究所です。博物館相当施設として、アート・スペース（三田キャンパス南別館1階）では年間を通じて展覧会を開催しています。また、研究会・公演などの各種催事の開催、アーカイヴの構築、国内外における芸術資料の研究的活用の促進などの活動を通して、現代における芸術の問題に取り組んでいます。〔三田〕

言語文化研究所

世界の諸言語、諸地域や各時代の文化・思想、言語学・言語理論などの研究を推進しています。学部では開設していない個別言語の講座を含むサンスクリット、アラビア語、古代エジプト語、ヘブル語、タイ語などの12言語におよぶ講座を開設しています。〔三田〕

外国語教育研究センター

慶應義塾の外国語教育を全体的に捉え、活動する研究機関です。外国語教育に関する研究を推進するほか、特色ある外国語科目の開講や自律学習環境の提供を行い、国際舞台で通用する言語運用能力の習得をめざす塾生を支援しています。〔三田・日吉〕

教職課程センター

教職課程の運営のほか、教員養成に関する調査・研究を推進しています。学生は教職課程センターに登録（例年300名から400名が新規登録）し、所定の科目を履修することで中学校および高等学校の教員普通免許状に必要な単位を修得できます。〔三田〕

教養研究センター

多分野にわたる教養教育に関する研究活動を推進することを目的に設置されました。大学教育カリキュラムの研究、身体と言語のあり方をめぐって新しい「知」を探り、言語力育成を目指す研究や実験授業、学問的・知的活動のためのスキル・考え方を身につけるアカデミック・スキルズを学部横断的に提供しています。〔日吉〕

国際センター

国際交流活動の拠点として世界各地の協定大学と研究者や学生の交流を推進しています。義塾で学ぶ留学生や留学を希望する学生をサポートし、短期海外研修プログラムも運営しています。また、「国際センター講座」として英語による科目を年間約80科目設置しています。〔三田〕

GICセンター

GICセンター（Center for Global Interdisciplinary Courses）は国際的かつ学際的な人材の育成を主たる目的として設立されました。GIC科目では、講義、質疑応答、ディスカッション、レポート、試験等の一切が英語（またはその他の外国語）で行われます。約80科目のGICセンター独自科目と約400科目のGIC認定科目は4つのキャンパスに広がり、全ての学部生が履修することができます。GIC科目を40単位以上取得した学生にはGIC Program修了証が授与されます。〔日吉〕

斯道（しどう）文庫

麻生太賀吉氏寄贈の図書を基に、和書・漢籍と基本研究書など約17万冊を所蔵し、国内外の和漢書の現地調査、マイクロフィルムやデジタル撮影による副本作成、本の比較校勘などを行っている東洋古典籍学（書誌学）の研究所です。〔三田〕

福澤研究センター

福澤諭吉と慶應義塾を視野に置き、近代日本研究に資することを目的に設立されました。福澤および義塾の歴史に関する資料の収集・整理・保存や、福澤門下生などの義塾出身者についての調査研究のほか、大学設置講座、講演会なども行っています。〔三田〕

東アジア研究所

慶應義塾の東アジア研究を国内的・国際的ネットワークを通して発展させるため、学際的共同研究を推進しています。そのために、内外の研究機関や研究者との学術交流を図り、歴史研究と現状分析、および基礎研究と応用研究を重層的に展開しています。研究所内に、現代中国研究センター、現代韓国研究センターが設置されています。〔三田〕

日本語・日本文化教育センター

留学生に対する日本語・日本文化に関する教育の発展を目的として設置しています。別科・日本語研修課程、学部の第二外国語としての日本語の授業を運営し、文学研究科・国文学専攻日本語教育学分野にも協力しています。別科・日本語研修課程では約180名の留学生が学んでいます。〔三田〕

メディア・コミュニケーション研究所

メディア・コミュニケーションの研究と教育を目的にしています。研究生には、基礎科目やマス・メディアの制度、法律、政策、歴史などに関する科目、実務家による新聞・放送・広告の授業などを開講しています。研究生は「研究会」が必修です。〔三田〕

体育研究所

健康・運動・スポーツに関する研究と教育を目的とした組織です。塾生・教職員を対象とした各種大会や講演会など、スポーツの振興を目的とする活動も行っています。体育科目の授業のほか、地域住民への感動教育・体験教育の一助も担っています。〔日吉〕

自然科学研究教育センター

自然科学の研究と教育を促進し、さらなる質の向上を意識しながら、世界文明に貢献することを目的としています。学部、キャンパス、研究領域を超えるだけでなく、一貫教育校とも連携しながら、自然科学における研究と教育活動を行っています。〔日吉〕

Correspondence Courses

〔通信教育課程〕

慶應義塾大学の通信教育課程には戦後間もない1948年の開講以来、70年以上の歴史があり、さまざまな事情で通学課程に通えなかった人、自分の向学心をさらに満たしたい人、自らの学歴を高度化することで職業的なステップアップを目指している人を中心に現在、全国で8,000人以上の幅広い年齢や職業の学生が学んでいます。文学部、経済学部、法学部の3学部があり、教授陣は通学課程と同じ教員で構成され、学生は所定の単位を修得すれば慶應義塾大学の卒業生として、通学課程と同じ学士の学位を取得できます。学びやすい学費設定も魅力の一つです。

【入学資格】

大学を卒業することを目的とした正科生には、学歴により、主に高等学校卒業者および卒業見込みの人を対象とした普通課程、短期大学・高等専門学校卒業者および卒業見込みの人を対象とした特別課程、大学卒業者および卒業見込みの人を対象とした学士入学の三種類があります。普通課程では卒業のために4年間、特別課程では3年間、学士入学では2年半は在籍する必要があり、どの課程も入学時から最長12年間在籍できます。

【学習システム】

通信教育課程では、テキストによる通信授業、スクーリングによる面接授業を中心に、放送授業、インターネットによるメディア授業（E-スクーリング）などさまざまな授業形態を組み合わせて、自分のペースで学習に取り組めます。通信授業は配本によるテキストの学習が終わり、レポートを提出すると、その科目について科目試験を受験することができます。試験は原則として年4回（1回に東京を含む14都市程度で実施）、大学から派遣される教職員のもとで行われます。スクーリング（夏期スクーリング・夜間スクーリング・週末スクーリングなどがあります）は、一定期間通学して教室等で直接授業を受け、試験を受けるものです。卒業には所定の単位を修得した上で、本学専任教員の指導を受けながら卒業論文を作成し、卒業試験に合格することが必要です。

【文学部の通信教育課程】

―― とらわれのない眼で人間を探求する ――

慶應義塾大学の文学部は、単に文学系統だけでなく、人文科学のすべての領域を広くカバーしています。そこでは人間社会の機構や機能を含め、人間そのものの探求を究極の目標として、さまざまな研究と教育がおこなわれています。通信教育課程でも、哲学、倫理学、美学美術史学、社会学、心理学、教育学、人間科学の各専攻を中心として、広義の哲学に関する研究をおこなう第1類（哲学、美学、人間関係学、図書館・情報学の学士号が取得可能）、日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学の各専攻を中心として、歴史に関する研究をおこなう第2類（史学の学士号が取得可能）、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学の各専攻を中心として、文学と言語に関する研究をおこなう第3類（文学の学士号が取得可能）に分かれ、現在3,500人以上が学んでいます。自分の所属だけでなく、他の類の科目も幅広く履修することが求められます。また、教職課程の必要な単位を合わせて修得すれば、中学校教諭1種（国語科、社会科、英語科）や、高等学校教諭1種（国語科、地理歴史科・公民科、英語科）の教員免許状を取得することも可能です。

【慶友会】

全国各地に存在する通信教育課程の在学生が自主的に結成している慶友会は現在50団体以上に及び、定期的に例会を開いて勉学上の情報を交換したり、講演会、研究会をおこなったりしています。各慶友会の活動地域に慶應義塾の教員を招き、セミナーや講演会を開くことができる講師派遣制度もあります。こうして先生方と親睦を深め、楽しい学習の機会を持つことができるのも通信教育課程の特色です。

さらなる詳細は、通信教育課程のホームページをご覧ください。
https://www.tsushin.keio.ac.jp

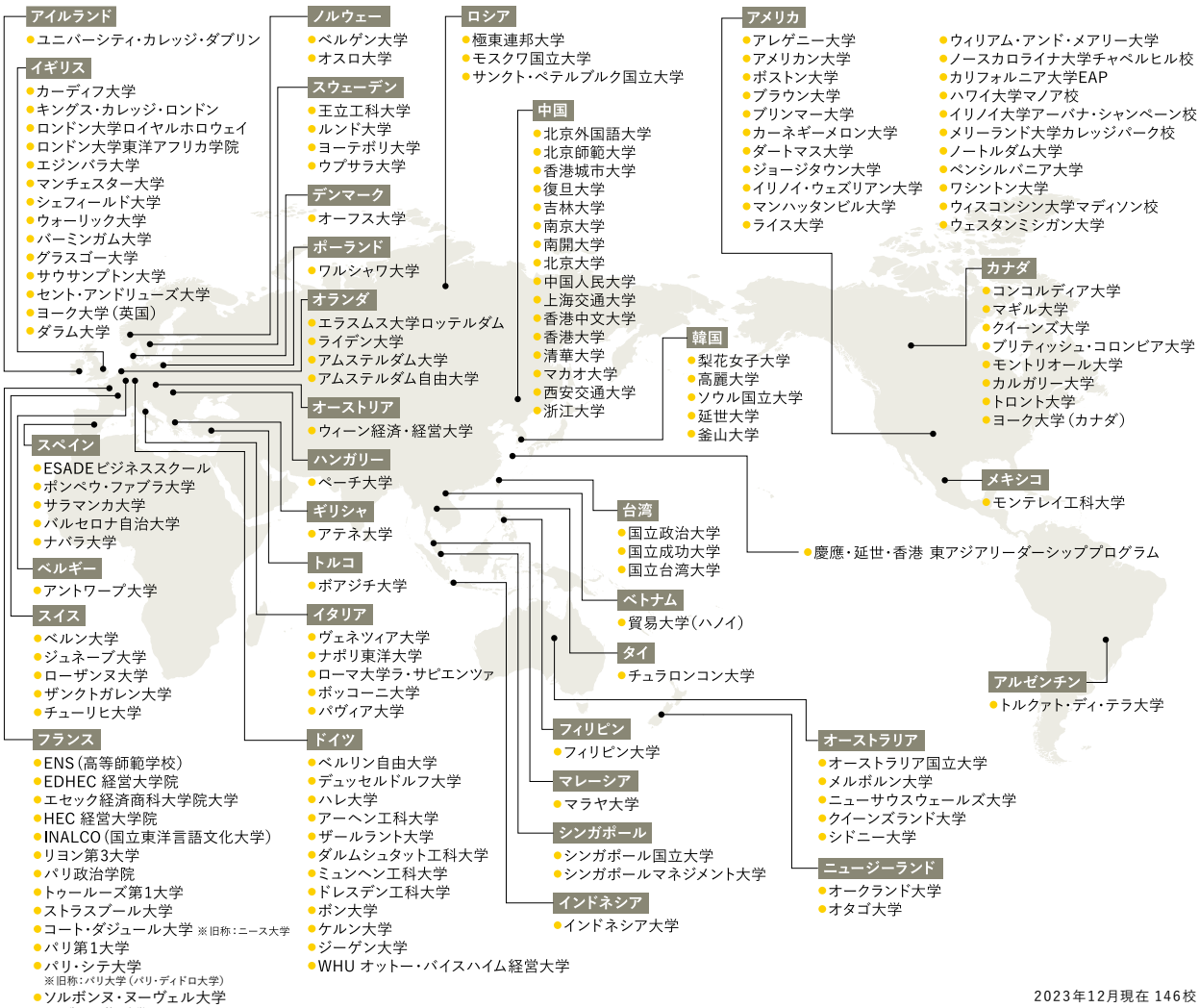


留学のすゝめ

慶應義塾の創設者・福澤諭吉は幕末期にアメリカとヨーロッパの両方を時間をかけて視察することができた、当時としては稀な知識人でした。その伝統を継ぐ慶應義塾大学は、学問と見聞を広く世界に求めることを極めて重視しています。

本学は現在、世界の300以上の大学・高等教育機関等と協定を締結し、学生交換、学術交流、研究連携を展開しています。協定校との間には一年間の派遣交換留学制度や夏季・春季休校を利用した短期海外研修プログラムなどがあります（詳細は国際センターのウェブページをご覧ください。https://www.ic.keio.ac.jp）。交換留学生として留学すれば、授業料は本学に納入するだけで済みます。ここでは、フランスに一年間の交換留学をした小島世莉さん（仏文学専攻）の体験記を紹介しましょう。

〔派遣交換留学（全塾）協定校一覧〕



2023年12月現在 146校



Seri Kojima

私が交換留学を目指し始めたのは大学2年生の春頃でした。それまでは、数年間勉強してきたフランス語の世界に飛び込んで生活してみたいという漠然とした憧れを持ってはいたものの、実際に留学に踏み出すことができずにいました。ですがこのままだと絶対に後悔するという強い思いに背中を押され、留学を決めました。交換留学に出願するにあたり、まずは志望する留学先の大学を選びます。大学選びは過去の先輩方の報告書を読んだり、大学のホームページを見たりして情報を集めました。慶應の協定校は規模が大きく多様な学びができる大学が多いためとても迷いましたが、専攻している仏文学の知見を深めたいと思い、文学部の授業が充実しているリヨン第三大学を志望することに決めました。



志望大学を決めてからは、出願する書類の準備とフランス語力の向上に努めました。志望先の大学はフランス語B1レベルが条件でしたが、現地の大学の授業についていけるようにB2の受験を決めて日々勉強していました。慶應の授業でネイティブの先生の授業を今まで以上に多く履修したり、ラジオやYouTubeを視聴したりして、スピードの速いフランス語に慣れるようにしていました。思い返すと通学中や寝る前など、日常のあらゆる場面でフランス語に触れていたように思います。またネイティブの先生に何度もDELFの面接対策をしていただくことで、実際に文章を組み立てて話す練習にも取り組みました。

学内の書類選考と面接を終えて2年生の2月ごろに派遣交換留学生として選んでいただいてからは、すぐに現地の大学に通う準備を始めました。海外に行くのが初めてだった私は、寮の申請や大学の登録など多くの手続きがフランス語で行われることに戸惑いを感じましたが、出発の夏が近づくにつれてその不安がワクワクに変わっていったのを覚えています。



留学先での生活は、日常のどんな場面を切り取っても本当に素敵な思い出に溢れています。初めの頃は言語や文化の壁に圧倒され、自分の力不足に落胆することもありました。しかし諦めずに積極的に人と関わる機会を作ることで、フランス語の上達を実感すると同時に多くの友人を作ることができました。休みの日には公園でピクニックをしたり友人の実家に遊びに行ったりと、徐々に現地での生活に溶け込み、毎日が充実していました。友人たちと大学で勉強を教え合ったり、授業の後に一緒に夕飯を作ったりした日常が今では恋しいです。もちろん大学の授業についていくことは大変ですが、周りの力を借りながら毎日の復習を徹底し、最後の試験に合格できた時にはこれまでにない大きな達成感を感じました。こうして起臥寝食の場をフランスに移転し多くの経験をすることで、私自身の人間力やフランス語力は大いに成長したと感じています。

帰国して振り返ると、この留学で多様な価値観や生き方に触れたことで、自分がこれまでいかに固執した考え方にとらわれていたか、どれだけ狭い世界で生きてきたかということに気付かされます。同時に、自分の中にある生き方への引き出しが増え、多角的で豊かな考え方ができるようになりました。その上で就職活動を始めるにあたり、今は広い視野を持って自分がやりたいことを模索しています。まだ詳しい進路は決まっていませんが、将来はフランスで出会った友人たちのように自分が誰かのために全力を尽くせる人間になりたいと思っています。

奨学金

奨学金制度とは、能力のある学生に対して一層の成長を促すこと、もしくは金銭的・経済的理由により修学困難とされる学生に対して修学を支援することを目的として金銭の給付・貸与を行う制度のことです。

慶應義塾大学で扱う奨学金は、「慶應義塾大学独自の奨学金」、国の育英事業である「日本学生支援機構奨学金」・「高等教育の修学支援新制度」、そして「民間団体・地方公共団体の奨学金」の3つに大きく分かれます。奨学金によっては併願・併用することも可能です。

まず、慶應義塾大学独自の学内奨学金は、すべて返済不要の給付型奨学金で、今後も拡充していく予定です。その多くが経済支援を目的としていますが、成績優秀者を対象とした奨学金、家計状況が急変した際の支援、地方出身者や海外でのグローバルな学習活動への支援など、学生のニーズに対応するさまざまな奨学金を用意しています。塾員（卒業生）で結成される様々な三田会（同窓会）や篤志家など、慶應義塾大学を支援してくださる多くの方々からいただいた寄付金で運営している奨学金が多く、「社中協力」を実感できるのも特徴です。ほとんどの奨学金の給付期間は1年間ですが、原則再申請できます。1年間単位で申請できるため、それだけ多くの学生にチャンスがあります。入学後の申請が中心ですが、一般選抜前に申請できる地方出身者向けの奨学金として、1都3県（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）以外の日本国内の高等学校等出身者を対象にした返済不要の給付型奨学金「学問のすゝめ奨学金」があります。

民間団体・地方公共団体の奨学金は、多くの場合、一度採用されると卒業時まで継続的に給付または貸与されます。

国が扱う日本学生支援機構の奨学金には、主に高校予約採用と入学後に申請する定期採用があり、返還義務を負う貸与型（無利子の第一種と有利子の第二種）と授業料減免と返還不要な給付型奨学金による「高等教育の修学支援新制度」があります。

これらの奨学金は、いずれも家庭の経済状況や学力・人物によって選考されますが、それぞれ趣旨・金額・受給期間・返済義務の有無などが異なります。各々の特性を認識し、自分にあった奨学金を選びましょう。詳細については、奨学金webサイト（https://www.students.keio.ac.jp/com/scholarships/apply/form.html）をご覧いただくか、学生部福利厚生支援担当（03-5427-1570）へお問い合わせください。

文学部学生が出願できる奨学金の概要（すべて2023年度実績）

【学内奨学金】（給付型）（2023年度実績）

慶應義塾大学給費奨学金	経済的に修学困難であると認められ、 成績・人物ともに優秀な者。	50万円もしくは 25万円 / 年額
慶應義塾大学修学支援奨学金	急激な家計状況の変化、経済的な困窮のため、 経済的に修学が困難な者。	学費の範囲内の金額 （平均は年額約30万円）
慶應義塾大学創立150年記念奨学金 （海外学習支援）	勉学の意欲を持ちながらも、 経済的理由によりグローバルな学習活動に 参加することが困難な者。	10、20、30万円 / 年額 ※参加プログラム・渡航先の 国や地域による
慶應義塾維持会奨学金	人物・学業成績ともに優秀で、 かつ経済的に学業に専念することが困難な者。 出身高校の所在地が東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県 以外の道府県の者を優先。	50万円 / 年額
指定寄付奨学金	奨学金によって異なる。 育英型、経済支援型、家計急変者支援型があり、約30種ある。	10～60万円程度 / 年額 ※奨学金によって異なる

学内の奨学金に関する情報は塾生サイトを閲覧してください。

【学問のすゝめ奨学金】 一般選抜出願時（入学前）に申請可能な奨学金です

募集対象	奨学金額	受給期間
■ 慶應義塾大学の学部第1学年に入学を強く希望する東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県以外の日本国内の高等学校等出身者 ■ 人物及び学業成績が優秀であるにもかかわらず、経済的理由により本学への入学に困難を来している者	■ 初年度年額60万円 ■ 初年度は上記金額に入学金相当額を加算（20万円） ■ 入学2年目以降は成績優秀者の奨学金額を増額（年額80万円） ■ 奨学金の返済は不要	■ 最長4年間 ■ 毎年の審査を経て継続受給が可能

※採用された学生が国による「高等教育の修学支援新制度」の対象となる場合は、奨学金額が減額となることがあります。

7月中旬に以下のwebサイトで募集要項が公開されます。
https://www.students.keio.ac.jp/other/prospective-students/scholarship-gakumon.html

学問のすすめ奨学金

【民間団体・地方公共団体奨学金】 給付型と貸与型を合わせて、100種以上あります。（2023年度実績）
民間団体、地方公共団体の奨学金に関する情報は塾生サイトを閲覧してください。

【国による「高等教育の修学支援新制度」】 授業料減免と給付型奨学金による支援が受けられます。
支援対象要件や支援内容は右記のwebサイトで確認できます。 日本学生支援機構 **https://www.jasso.go.jp/shogakukin/about/kyufu/**

学生生活と奨学金

わが国では「大学で学ぶ若者たちのための奨学金が不足している」と言われて久しいのが実情ですが、それでも少しずつ慶應義塾内外の奨学金は増えてきています。奨学金を受けて、家計を助けながら活き活きと勉学を続けている在学生たちの声を聞いてみましょう。奨学金には様々な種類があり、応募や受給の仕方もいろいろですが、これから慶應義塾大学で学ぶ方々には、彼らの話も参考にして、自分に向いた奨学金を見つけていただきたいと思います。



住谷 広大 君

東洋史学専攻3年（インタビュー時）

―― 慶應義塾大学に入ろうと思ったきっかけは？

住谷　僕は日吉キャンパスからも近い神奈川県立川和高校の出身なんですけれど、わりと早い時期から慶應義塾大学の文学部を受験することは決めていました。自宅から近いこともありますし、有り体に言って、偏差値の高い大学に行こうという気持ちもあって。歴史が好きだったので、文学部というのも、自然と決まりました。慶應にはなんとなく「カッコいい」っていうイメージを持っていましたし。

―― 奨学金は、いつ申し込んだのですか？

住谷　奨学金のことは、受験生の頃は全然考えていませんでした。入学した時には奨学金ガイダンスもあるにはあって、親には行けと言われていたんですけど、なんとなく行かずじまいになってしまって…。たまたま、同じ慶應に通っている友人が、奨学金を受けるための作文を書いているのを見て、「へえ、そういうのがあるんだ。僕も出してみようかな」って思ったのがきっかけでした。それで、学生部で奨学金の情報が載っている冊子をもらって、家は母子家庭で裕福ではありませんでしたから、最初は経済状態を審査される給費奨学金を選んで応募しました。書類を作るのは、「これは、意外と大変だぞ」と思いました。将来の進路希望とか意外と詳しく書く欄があって…。経済状態が苦しい、ということなどは切々と（笑）…、「大学院まで行って勉強したいので経済的に難しい」、ということを書きました。その次の年は、別の奨学金に応募して、これもいただくことができました。これは、成績が審査された上でいただける奨学金でしたので、「勉強頑張りました！」ということを書きましたね。いただいた奨学金は、ほぼ学費に当てました。そうすることで、親が「バイトして、お金を家に入れろ」って言わなくなったので、助かりました。勉強してお金がいただけるというのは、本当にありがたいことだと思います。

―― 奨学金を受けるような成績を収めるためには、何か心がけることがあるでしょうか？

住谷　規則正しい生活を送るということですかね。早く寝て、早く起きて、授業で寝ないということじゃないでしょうか。そして、授業をさぼらない、ということですね。これが、意外と難しいですよね、大学生ですと。そのためには、早く寝ることです、もう10時くらいにはスパッと寝ると…（笑）。僕は、わりと勉強なんかも短時間で集中してやる方が好きな方かな、と思います。

―― アルバイトやサークル活動などもしていますか？

住谷　以前は、自宅の近所のショッピングモールで清掃のアルバイトをしていたんですけど、リストラされちゃったので、最近は塾の採点のアルバイトを短期でやっています。サークルは特にやっていません。

―― 余暇はどんなふうに過ごしていますか？

住谷　去年は結構忙しくて、家に帰って来たら寝て、起きたら大学に行って、という感じだったんですけれど、今年はまあまあ時間があって、そういう時は…、漢文読んでますかね。やっぱり、大きな辞書が必要なので、図書館で漢文を読んでいます。諸橋漢和辞典みたいな大きな辞書は、自分で買うと高いですからね。高校時代から漢文が好きだったというわけでもありません。慶應の入試は、漢文はないですから。でも大学に入ってから、興味が湧いて来ました。

―― 漢文が好きになったきっかけがあったんですか？

住谷　一年生の時に『荘子』を読んだら面白くて、「東洋史もいいな」って思いました。第二外国語は中国語を取っていましたが、中国語も面白かったです。日本語と共通の部分も多いので、分かりやすいし、思ったよりは早く上達できた気がします。今は、桐本東太先生のゼミにも所属しているのですけれど、楽しいですね。やっぱり、好きなことを勉強できていますからね。『世説新語』という南朝宋の時代の面白い本があって、その訳本を、僕が2年生の時の5月くらいにたまたま読みまして、「この時代のことを勉強しようかな」と思うようになりました。教職課程も履修していて、将来は教員か研究職を目指したいと思っています。

―― 専門以外で、面白いと思った授業はありましたか？

住谷　教職課程では、体育も履修しなくちゃいけないんですけど、その時に習った気功も面白かったですね。「体育」と言いながら、授業の半分くらいは横になっていたんですけれど。先生は中国から帰化された方で、朝の一時限から気功というのは、気持ちが良かったです（笑）。



Event

〔オープンキャンパス2024〕

今、世界は大きな変化の時代を迎えています。このような時代には、従来のものの見方や考え方が通用しにくくなります。そこで重要となるのが、自分の頭で考えること、すなわち学問することです。

学問というと難しく聞こえるかもしれませんが、どんな学問も、身近で小さな問題に興味を持ち、「?」を抱くことからスタートしています。このような営みを続けることが、徐々に大きな成果となって結実し、社会の問題を解決する力となっていくのです。



2024年度は、さまざまな学問の魅力に触れていただけるよう、入学広報イベント「オープンキャンパス2024」を開催します。文学部をはじめ全学部の教員が高校生や受験生の皆さん向けに模擬講義や学部説明を行い、学生の声を聞くことのできる機会を設けます。慶應義塾大学における学問の多様性、さらに文学部における研究内容の幅広さと奥深さを体験する絶好の機会といえるでしょう。

「課題が与えられ、正解を教わる」という高校までの授業とは異なり、「課題を自ら見つけ、解決策を生み出す」という大学での学び、学問を体験してみませんか。皆さんの参加を、心より歓迎します。





	講　義　編	学生生活編
開催日時	2024年6月30日(日)・7月7日(日)	8月1日(木)・2日(金)
開催場所	慶應義塾大学 日吉キャンパス	三田キャンパス
対象学部	文学部をはじめとする慶應義塾大学全学部	

〔オープンキャンパス2024〕は事前申込制です。

申し込みの方法や実施内容の詳細については、
慶應義塾大学入学案内ページ
https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/

および文学部のホームページ
https://www.flet.keio.ac.jp/
で随時更新します。









※写真はイメージです。

〔公開講座〕



2024年度公開講座

「交流する文学部」

慶應義塾大学文学部は、2010-13年度に公開講座「文学部は考える」を開講し、続いて「行動する文学部」(2015年度、文学部創設125年)、「文学部を体感する」(2016年度)、「橋渡しする文学部」(2018年度)、「文学部のひらく世界」(2019年度)、「めぐりあう文学部」(2020年度)、「問いかける文学部」(2021年度)、「対話する文学部」(2022年度)、「越境する文学部」(2023年度)を開講してきました。2020年度と2021年度は、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点からオンラインで動画配信となりました。

今年度は、「交流する文学部」と題して、英米文学(近代小説、比較文化論)、国文学(江戸・明治文学、日本漢文学)、心理学(感情神経科学)、倫理学(ドイツ倫理思想)という多彩な分野から、それぞれの専門家に登壇いただきます。17の専攻と2つの部門からなる文学部を横断して、文学部の広がりを感じ取っていただければ幸いです。

参加を希望される方は下記文学部ホームページより事前にお申し込みください。最新情報はホームページにてお知らせいたします。

6月1日(土)　グローバル化する文学研究：日本からはじまる『ガリヴァー旅行記』の世界

合山林太郎(国文学)×**原田範行**(英米文学)　**司会：勝沼聡**(東洋史学)

6月15日(土)　感情の交わり、流動することば：心理×倫理×物語

石田京子(倫理学)×**寺澤悠理**(心理学)　**司会：若澤佑典**(英米文学)

〔対象〕高校生(保護者・高校関係者)　〔会場〕三田キャンパス 北館ホール(1階)
〔時間〕14:30～16:30(14:00開場)　〔受講料〕無料

〔参加申し込み〕詳細・最新情報は文学部ホームページに随時アップします。
https://www.flet.keio.ac.jp/

〔お問い合わせ〕
慶應義塾大学 三田キャンパス 学生部内公開講座事務局
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
E-mail：bun_kouza@info.keio.ac.jp

Data





文学部入学試験データ

志願者数・入学許可者数

	2023年度	2022年度	2021年度
志願者数	4,056	4,162	4,243
現役	2,387（58.9%）	2,461（59.1%）	2,405（56.7%）
男子／女子	男子2,239／女子1,817	男子2,238／女子1,924	男子2,376／女子1,867
入学許可者	1,172	1,189	1,208
現役	798（68.1%）	818（68.8%）	776（64.2%）
男子／女子	男子550／女子622	男子559／女子630	男子601／女子607

	2023年度		2022年度		2021年度	
	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
帰国生	30	13	35	12	25	12
留学生	197	33	200	61	175	52
塾内進学	48		57		76	
自主応募制推薦入試	260	121	343	123	350	125

試験科目

□ 外国語（英語（独自試験）・独語・仏語・英語（外部試験利用）のうち1科目を選択）
□ 地理歴史（日本史・世界史のうち1科目を選択）
□ 小論文

日本史・世界史選択者数

	2023年度	2022年度	2021年度
日本史	1,995	1,941	1,902
世界史	2,061	2,221	2,341

※外国語科目は約99%が英語で受験。※入試の年度は入学時の年度で表示されます。

文学部卒業生上位就職先企業

2021年度	
楽天グループ	12
東京海上日動火災保険	11
エヌ・ティ・ティ・データ	10
アクセンチュア	10
日本放送協会	8
三菱UFJ銀行	7
大和証券	6
りそなホールディングス	5
三井住友銀行	5
三井住友海上火災保険	5
明治安田生命保険相互会社	5
東京都	4
横浜銀行	4
防衛省	4
富士通	4
NTTドコモ	4
ジェーシービー	4
日本アイ・ビー・エム	4
セプテーニ	4
日本電気	4
第一生命ホールディングス	4

2020年度	
東京海上日動火災保険	12
楽天	10
明治安田生命保険相互会社	7
りそなホールディングス	7
みずほ銀行	6
野村総合研究所	6
ファーストリテイリング	6
日本生命保険相互会社	5
エヌ・ティ・ティ・データ	5
東日本旅客鉄道	5
富士通	5
三井住友海上火災保険	4
日本放送協会	4
博報堂	4
日本電気	4
大和証券	4
ソフトバンク	4
太陽生命保険	4
NTTドコモ	4
日本アイ・ビー・エム	4

2019年度	
楽天	11
みずほ銀行	10
東京海上日動火災保険	9
日本放送協会	6
大和証券	6
エヌ・ティ・ティ・データ	6
東京都	6
三菱UFJ信託銀行	6
三井住友信託銀行	5
電通グループ	5
レバレジーズ	5
博報堂	5
三井住友銀行	5
ゆうちょ銀行	5
全日本空輸	4
第一生命保険	4
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ	4
日本製鉄	4
明治安田生命保険相互会社	4
日本生命保険相互会社	4
三井住友海上火災保険	4
日本通運	4
日本電気	4
慶應義塾	4
アビームコンサルティング	4
富士通	4
弁護士法人アンダーソン・毛利・友常法律事務所	4
ソフトバンク	4
KDDI	4
リクルート	4

※人数は原則として本人の届け出に基づく。（当該年度の翌年4月30日現在）

Frequently Asked Questions

入試、学生生活、進路など、受験生の皆さんからよくいただく質問をまとめました。

Q 文学部に入学するにはどのような方法がありますか？

A 一般選抜のほか、文学部独自の制度として「自主応募制による推薦入学者選考」があります。慶應義塾大学文学部を第一志望とし、一定の資格を満たしていれば、だれでも自由に応募できます。また慶應義塾内の5つの高等学校からの塾内進学、外国人留学生入学試験、帰国生入学試験による入学があります。

Q 文学部には、高校のような「クラス担任」はいるのですか？

A 第1学年に関しては、希望する語種によってクラスに振り分けられ、各クラスには1名ずつ担任が付きます。第2学年以降の各専攻にはそれぞれ専攻担任が複数おり、学生生活や履修等の相談に応じます。また、文学部には日吉・三田各々に学習指導、学生部の委員がいます。

Q 第2学年で各専攻に進級した後、専攻の変更はできますか？

A 第2学年進級後の専攻変更は原則として認められていません。第1学年で行われる学部や各専攻のガイダンスに出席したうえで、慎重に選定して下さい。

Q 志望する専攻には必ず入ることができるのでしょうか？

A 多くの専攻では、希望した学生全員を受入れています。ただし、専攻によっては、希望する学生が一定数に達した場合に選考などを行うことがあります。

Q 文学部で取得できる資格にはどんなものがありますか？

A 中学校・高等学校教員免許（国語、社会、地理歴史、公民、英語、中国語、独語、仏語、情報）、図書館司書、司書教諭、学芸員などがあります。

Q 文学部卒業後、文学研究科への進学を考えています。内部推薦などによる大学院進学はありますか？

A 文学研究科の場合、今のところ内部推薦はありません。一般入試および留学生入試（修士課程）による入学のみが認められています。



下記のYouTube上に**文学部紹介動画**を公開しています。
教員や学生の生の声をきくことができますので、是非一度ご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=GLKn_nxSpHs

慶應義塾大学 文学部ホームページ　**https://www.flet.keio.ac.jp/**

学部入試全般に関するお問い合わせ

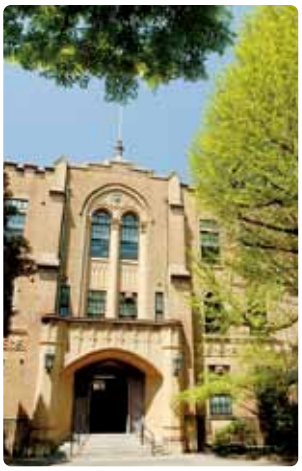
入学センター 03-5427-1566 〈窓口利用時間〉**月～金9:00～11:30、12:30～16:30**（土・日・祝日休業）
※お問い合わせの際は、必ず下記URLから事務室の受付状況をご確認ください。

https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/

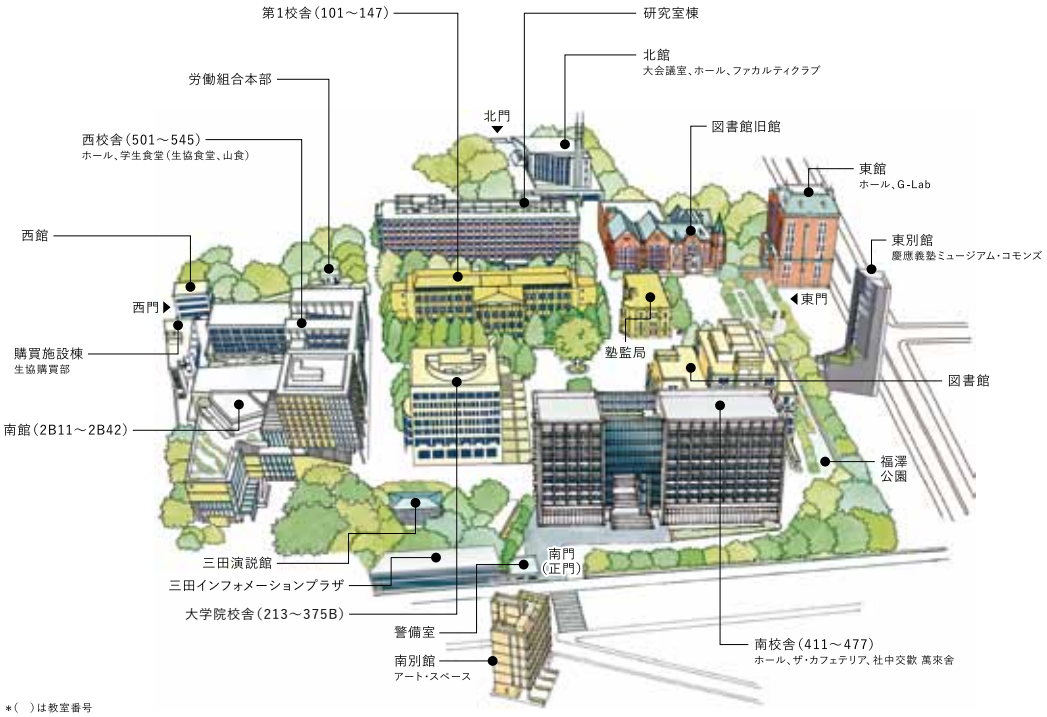
● 全10学部6キャンパスおよび入試に関する情報等を掲載した「慶應義塾大学ガイドブック」を配布しています。
● 上記URLから請求することができます。（三田・日吉キャンパスの警備室でも入手できます）

慶應義塾大学ホームページ　**https://www.keio.ac.jp/**

Campus Map



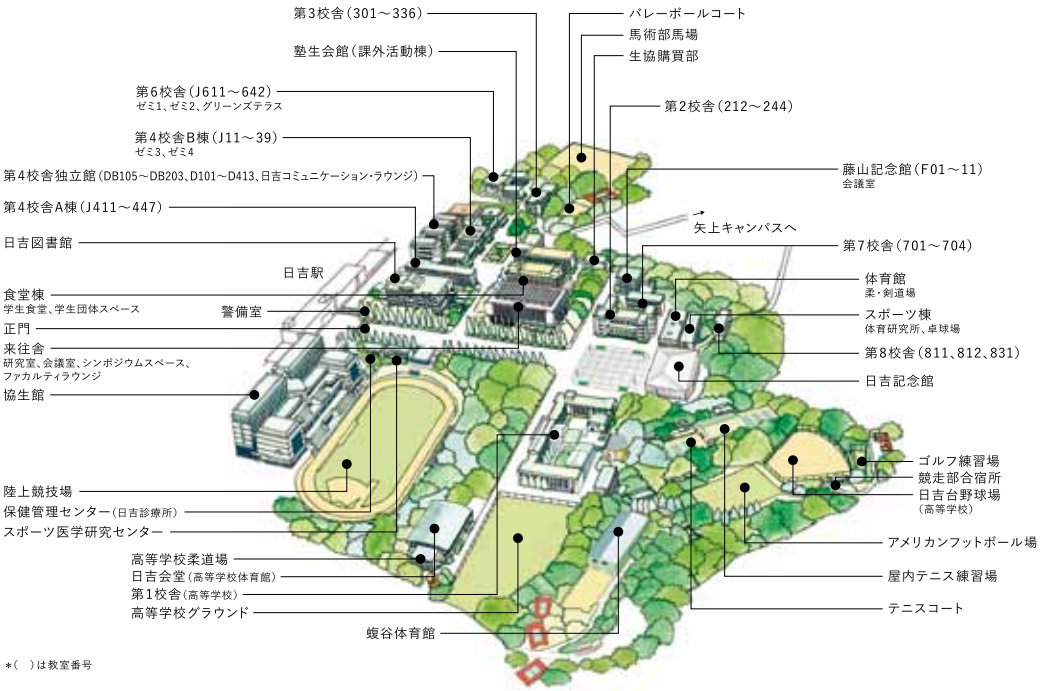
Mita Campus
〔三田〕



＊（　）は教室番号



Hiyoshi Campus
〔日吉〕



＊（　）は教室番号



https://www.flet.keio.ac.jp/

発行：慶應義塾大学 文学部（2025年度入学者向け）